嘘吐き寓話

葉月羽音

1：嘘吐き少女の日課

　ある所に、嘘吐きな少女がおりました。小さな頃から少女は嘘を吐くのが大好きで、可愛い笑顔で本当の事の様に嘘を紡いでいました。
　最初の内は子供が紡ぐ他愛のない嘘でしたから、周りの人達も笑って少女の嘘を受け入れていました。
　いつか大きくなればその嘘が誰かを傷つける事になるのだと学ぶだろうと、そう思っていたのです。
　しかし少女は時を経ても、大きく成長しても、嘘を吐く事を止めませんでした。少女にとって息をするように嘘を吐く事が当たり前になっていたのです。
　沢山の嘘を吐いてきた少女は、いつからか、死にまつわる嘘ばかり吐き始めました。
　朝起きて隣のお爺さんの家にお邪魔した時、少女はお爺さんにこう言いました。
「お爺さん、お爺さん」
「なんだい？」
「今日は一歩も家を出ちゃ駄目よ？」
「おや、それはどうして？」
「だって今日は、お爺さんが死んじゃう日なんですもの」
　お爺さんは困惑したように目を白黒させて、ついうっかり両手に持っていたカップを床に落としてしまいました。
　少女はそれを面白そうに見つめた後、別れの挨拶を残してその家を後にしました。
　次に出会ったのは畑仕事に向かおうとしているお婆さんです。
　大きな鍬を肩に背負ってよっちらおっちら歩くその背中に、少女は声を掛けました。
「お婆さん、お婆さん」
「おやおや、お嬢ちゃんどうしたの？」
「今日は畑に行っちゃ駄目よ？」
「おや、それはどうして？」
「だって今日は、お婆さんが死んじゃう日なんですもの」
　お婆さんは少女の言葉に驚いて、ついうっかり背負っていた鍬を地面へと落としてしまいました。
　少女はそれを楽しそうに見つめた後、別れの挨拶を残して立ち去って行きます。
　次に出会ったのは大きな鞄を抱えたお兄さんでした。どうやら仕事場へと向かうようです。
　少女はそんなお兄さんの元へと駆け寄って、行く先を阻むような形で声を掛けました。
「お兄さん、お兄さん」
「ん？　なんだい？」
「今日はお仕事に行っちゃ駄目よ？」
「どうしてそんな事言うんだい？」
「だって今日は、お兄さんが死んじゃう日なんですもの」

　呆気に取られたと言わんばかりに眼をまん丸に見開いたお兄さんは、ついうっかり鞄を持っていた手から力を抜いて落としてしまいました。
　少女はそれを可笑しそうに見つめた後、お兄さんに別れの挨拶を残して立ち去って行きます。
　次に出会ったのは可愛らしい帽子を被ったお姉さんでした。帽子に似合う可愛らしい格好をして家から出てきたお姉さんは何処かへ出掛けるのでしょうか。
　少女はそんなお姉さんの元へと駆け寄って声を掛けました。
「お姉さん、お姉さん」
「あら、どうしたの？」
「今日はお出掛けしちゃ駄目よ？」
「まぁ、なんでかしら？」
「だって今日は、お姉さんが死んじゃう日なんですもの」
　あんまりな言葉にお姉さんはついうっかり自分の言葉を無くして、口を大きく開けました。
　少女はそれを愉快そうに見つめた後、お姉さんに別れのあいさつを残して立ち去って行きます。
　少女は沢山の嘘を重ねました。しかし紡がれる嘘はたった一つ。「死」に関する事だけなのです。
相手は老若男女関係なし。知り合いを始めとして、出会った人に片っ端から出掛けてはいけないよ、死んでしまうから、なんて予言めいた嘘を笑顔で可愛らしく告げて去っていくのです。
　もちろんそんなのはすぐにバレてしまう嘘ですし、例え騙される初心者がいたとしても、近くに居た人が親切にそれは嘘だと教えてくれるのです。
　少女の嘘吐きは日課でした。息をするように、水を飲むように、睡眠を貪る様に、当たり前の様に繰り返される嘘吐き。
　そんな少女でしたから、少女と一緒に遊んでくれるような同い年の子はおりません。唯一遊んでくれるのは少女の吐く嘘だけです。
　少女はそれを悲しく思いませんでした。少女にとって一番大事な事は嘘を吐くことなのだと言わんばかりに、只管それだけを繰り返していきます。
毎日毎日、少女は嘘を吐き続けました。そしてその日課に付き合ってくれる人は徐々に減っていきました。
　少女に向けられる視線は優しいものから同情的なものへ変わっていきますけれど、終いにはいつまで続けるのかと呆れた視線を向けられてしまうのです。
　それでも少女の嘘は止まりません。出会った人、見かけた人、老若男女関係なく、少女は可愛らしい笑顔と一緒に嘘を吐き続けました。

2：嘘吐き少女の代償

　少女の嘘吐き日課は16歳になった今でも止まる事はありません。寧ろ嘘に付き合ってくれる人が減った分、躍起になって嘘を誇大化させている様にも見られます。
　声を掛けて無視する人が居たらその人の足を止めてでも嘘を吐きますし、その結果、怪我を負うことは日常茶飯事。そしてそんな少女を哀れに見ることはあっても手を差し伸べる人間は誰一人としていませんでした。
　今日もまた少女は嘘を吐く為に家を出ます。そんな少女を一緒に暮らしているお祖父さん、お祖母さんの二人が見送りに出てきました。
　少女は二人を振り返り、ニッコリと笑います。
「それじゃ、行ってきます」
　可愛らしい笑顔は微妙にひきつったものでした。口の中を切ってしまっているのか、上手く笑えないのです。
　よくよく見ればその身体には白い包帯が見え隠れ。怪我の酷さが一目で伺えます。
　しかし少女は日課を止めることはありません。嘘を吐く事が少女の生き甲斐なのだと言わんばかりに今日もまた、外へと繰り出していこうとします。
　そんな少女をずっと見守ってきたお祖母さんはこれ以上は耐えられないと、口を開きます。
「もうお止め。そんな嘘を吐いて誰が得をすると言うんだい？」
「お祖母ちゃん、誰かが得するから言葉を紡ぐんじゃないわ。誰かを想うから、言葉を紡ぐのよ」
「ならお前の言葉は誰かの為になっていると言うのかい？」
「えぇ、そうよ。きっといつか、解ってくれるわ。私が紡ぐ言葉の意味に。だから――お祖母ちゃん、今日はこれから出掛けちゃ駄目よ？」
「……どうしてだい？」
「だって、お祖母ちゃんは今日死んでしまうんだから」
　ニッコリと笑って、少女はお祖母さんに嘘を吐きました。
　何度も何度も言われ続けたその嘘に、お祖母さんはとうとう泣きだしてしまいます。
　少女はお祖母さんが泣く理由が解らずに首を傾げました。
「ねぇ、どうしてお祖母ちゃんは泣くの？」
　少女の言葉にお祖母さんは更に泣きました。お祖父さんは黙ったまま顔を顰めて少女を見つめます。
「あぁ、どうしてこんな事を言う子になってしまったんでしょう」
　嘆くその声にお祖父さんがそっとお祖母さんの肩に手を当て、少女を睨みつけます。少女はどうして睨まれるのか解らず、更に首を傾げてお祖父さんを見つめました。
「もうお前は私達の家族じゃない」
「え？」
「お前の様な奴は勘当だと言っているんだ」

　唐突のお祖父さんの宣言に少女は眼を白黒させて驚きました。お祖父さんはそんな少女を冷めた眼で見つめた後、背を向けます。
「いいか、二度とこの家に帰ってくるな。いや、この家だけじゃない。この街から出て行け。そして嘘を吐きたいなら魔女の森に住んでいる魔女相手にやってこい！！」
　低いしゃがれた声は少女の耳を貫きました。
お祖父さんは泣くお祖母さんを連れて家の中へと入っていきます。
　少女も咄嗟にそれに続こうとしますが、お祖父さんが少女を家に入れることは無く、少女の眼の前で扉は厳重に閉められてしまいました。
　それを見ていた周りの人達はあぁ、とうとうこうなったのか、と他人事。
　少女の視線が自分へ向けられる前に、と一人、また一人とその姿を消していきます。
　少女は閉められた扉の前で暫くジッと立っていました。夜が来て、朝が来て、昼が来て、夜が来て――そうしてようやく少女は自分の居場所が消えたのだと悟り、扉の前から動き出しました。
　少女は独りぼっちのまま、この街を出ていく事になってしまったのです。
　街中をとぼとぼと歩くその姿は寂しそうに見えますが、誰もが自業自得と見て見ぬフリ。少女自身も嘘を吐く気力も無いと言わんばかりに無言を貫きます。
　それでも表情だけは、と取り繕った笑顔。罅割れた仮面のそれは脆く儚いものでした。
　少女が住んでいた街の門から一歩足を踏み出した時、辛うじて浮かんでいた笑顔は消え去りました。壊れた仮面は元に戻らず、また、街を出るまでよく耐えたと言えましょう。
　少女は無表情のまま真っ直ぐ前を向いて歩きます。向かう場所はお祖父さんが口にした魔女の森でした。
　魔女の森とは少女の街に古くから伝わる言い伝えの場所でした。そしてそこには魔女が住んでいるとも言い伝えには残っていました。
　少女の記憶している限りでは、魔女は対価次第で願いをなんでも叶えてくれる存在でした。
　しかし魔女はとても気分屋。簡単に願いを叶えてはくれず、聞くだけ聞いて掌を返した反応を見せる、最低最悪な女だという言い伝えも存在しました。
　少女にとってどちらが正しい言い伝えかは解りません。しかし、言い伝え通りに願いを叶えてくれるのなら、魔女に会いに行きたいと思ったのです。

3：気分屋な魔女はこうして生まれた

　さて、そんな魔女のお話を一つ、ここで語りましょう。

　それはとても遠い昔々のお話です。
人間という種が生まれる前から魔女は世界に存在していました。一説には神様が魔女を創り出し、魔女はそれを真似て人間を生み出したのだと言われています。ですがここでは余談となりますので端に避けまして。
　魔女は願いを叶える術を、力を持ち合わせていました。勿論全てを無償で叶える事は出来ません。願いに見合った対価が必要となります。
対価さえあれば魔女はどんな願いもかなえられましたが、同時にどんな願いも叶えられるわけではありません。どれだけの対価を積まれようと、犯してはならない領域はあるものですから。
　――ただし、それは通常の魔女であれば、の話です。
　このお話の魔女は違います。生まれた時から桁外れの魔力を持って生まれたからか、禁忌をあっさり破り、且つ、どんな願いも対価次第で叶うという型破り極まりない魔女でした。
　己の身に不老不死の呪いを掛けたり、成長を止める時魔法を掛けたり、気に食わない人物の時を永遠に止めたりと、自分の為だけにその力を振るい、自分の好きなまま、想うがままに世界の片隅で禁忌を破り続けていました。
　魔女の振るう力の所為で、世界は少しずつ綻び、形を保てなくなっていきます。流石に見かねた神様は地上に降り立ち、魔女の首に黒い枷を嵌めました。
　それは魔女の力を制限する役目を持っており、それに気付いた魔女は神様に噛みつきます。
「ちょっと、傍観者気取りの神様がどうして私にこんな枷を嵌めるのかな？　まさか今更世界の為に動きます、だなんて愚かな事を言うつもりかい？」
「別に世界の為に動く気はない。ただ、この世界を象る箱庭は我が作り上げた最高傑作だ。それが壊れるのを見るのは忍びない。それだけの事」
「呆れた！！　結局自分の為に私の行動を制限するんだね？　やれやれ、傍観者気取りの神様も、愚かな人間と変わりないってことか」
　馬鹿にしたような魔女の態度に神様は眉一つ動かさず、魔女の枷を指差して言いました。
「その枷はお前の魔力を縛り付ける。どれだけお前がいつもの様に力を振るおうとも、禁忌を破る事はおろか、己の願いすら叶えられないだろう。枷を外したくば己が行ってきた禁忌破りの契約を人間の為に使え。その為になら枷は魔力を縛り付けることはない。よいな、お前がいう、愚かな人間の為にその力を振るえ――それがお前の世界に対する贖罪だ」
　淡々と言ってのけた神様は、魔女の反論聞かずにその姿を消しました。
　魔女は言い逃げした神様の言葉を信じようとはせず、自分の為に力を振るおうとしますが一向に上手くいきません。それどこから使う端から魔力を枷に奪われていき、枷の重みに魔女は苦しみました。

　それでも魔女は人間の為に今までの力を振るうことを良しとせず、足掻いて足掻いて足掻いて――数年の時を経て、ようやっと魔女は足掻く事を止めました。
　枷の重みに首を持ち上げられず、地面にべったりと身体を貼り付ける状態のまま生き続ける事に疲れたからです。
　そして魔女は己の力を嫌々ながらも人間の為に振舞いました。勿論それ相応の対価は必須事項。魔女はしっかりとそれを求めて頂戴していました。
　長い年月をそうして生きてきた魔女は、徐々に人間の愚かしさを憐れむようになり、その愚かさから生まれるほんの一握りの感謝の気持ちを愛しく思い、自然と枷を外す為でなく、己の為に進んで人間の願いを叶えるようになったのです。
　しかしやはり魔女は魔女。必ず対価を渡すから叶えてくれと言われても、それは気分次第でした。
　叶えてやるのは一握り。その一握りに入れるようにと人間が魔女に媚びる姿を魔女は楽しんでいたのです。
　けれどこの魔女は何度も言う通り気分屋です。楽しんだ挙句に叶える気はないとさらっと掌返すなんて当たり前の事でした。
　唯一魔女が対価を渡すから叶えてくれ、と懇願して即了承する相手は、心からそれを願い、その為にならこの命すら捧げるという人間だけです。
　愚かで憐れな人間全ての願いなど叶えたくない。だけど、一握りの感謝を与えてくれると解る人間になら、この力を振るおう。
　己の中に力を振るう制約を定めた魔女。そんな事など知らぬ人間には魔女はとても気分屋で、意地悪で、最低な女（…）だと伝わるようになってしまいました

4：気分屋な魔女と愚かな王様

　そんな魔女の元に、従者を引き連れて現れた王様。
　突然の訪問に驚く魔女を尻目に王様は開口一番にこう言いました。
「我が願いを叶えよ。その為なら幾らでも対価は支払おうぞ」
　魔女は内心呆れながらも笑顔を浮かべて首を傾げます。
「へぇ、幾らでも？　それって貴方様の命を差し出して、って言っても叶うのかなぁ？」
「ふん、我が願い叶うならこの命くらい幾らでも差し出してやる」
「おや、それはそれは……では貴方様の願いはなんなのかな？」
「永遠の命だ」
「……は？」
　今目の前の王様はなんと言ったのでしょう？
　魔女は聞き間違いをしてしまっただろうかと首を捻ります。
　ドヤ顔の王様はふんぞり返って魔女を見つめました。瞳には拒絶などしないだろうと言うよく解らない自信を宿らせながら。
　魔女はそれを見て自分の耳が可笑しくなったわけではない事を悟ります。
　一応の可能性を考慮して、王様の傍に控えている従者達にも視線を向けたのですが、従者達は揃って魔女から視線を逸らしました。流石に自分の主が可笑しな事を願い出ている事に気付いているのでしょう。
　誰もが口を閉ざして、しかし、魔女の出す答えを待っているようです。魔女はまたも呆れました。
　そしてそれを今度は隠す素振り見せぬまま溜息という形で示して見せたのです。
「やれやれ、貴方様は馬鹿なんだね」
　キパッと言い切ったその言葉に王様は言葉を無くしたようにポカンとしました。
　従者達はざわめき、各々厳しい顔立ちで魔女を見据えます。
「貴様、王様に対して無礼な口を聞くとは何事か！！」
「なんと恐れ多い事を！！」
「その命、この場で切り捨てられても文句は言えぬぞ！！」
　色めき立つ従者達。彼らの言葉を右から左へとサラッと流す魔女。
　対象的な二対の姿に王様は我を取り戻したのか、わざとらしい咳払いを一つ。
「ゴホン。……あー、魔女よ、余の願いは何を対価に差し出せばいい？」
　先程の問題発言を見事さらりと無視して自分の都合のいい方向へと王様は誘導するように言葉を紡ぎます。
　そのわざとらしさに器用に片眉吊り上げた魔女でしたが、すぐさまニッコリと笑顔を浮かべて結論を王様へと突き付けました。
「無理だね」
　清々しいその一言に迷いはなく、魔女はさてこれで会話は終了と言わんばかりに王様達に背を

向けました。
　王様はまたもぽかんとしましたが、今度はすぐに復活して遠ざかる魔女の背中を慌てて追いかけました。従者はそれを更に追いかけます。
　魔女は面倒な事になった、と舌打ち一つ。逃げる足を速めて突き進みます。しかし王様も諦めません。願いを叶えてくれるまではと鬼気迫る勢いで魔女の後を追いかけます。そして従者達も以下同文。
　魔女、王様、従者達の三つの立場があろうことか追いかけっこに興じるなんて誰が想像したでしょう。息つく暇も無く、隙も無く、それぞれがそれぞれの背中を追いかけて追いかけて――丸二日が潰れました。
「もう、いい加減にしてくれないかな。貴方様の願いを叶えるのは無理。どう足掻いたって無理なものは無理なんだよ」
　流石に三日も付き合う気はない魔女ですから、渋々と足を止めて後ろを追いかけて来ている王様とその従者を見遣ります。
　王様はゼィゼィと荒い息を吐きながらもその立場を誇る様に胸を反らして大威張り。潰れかけている従者達を振り返ることなく魔女に言いました。
「何が無理だと言う？　もしやそなたがどんな願いでも対価次第で全て叶える事が出来ると言うのは嘘なのか？」
「嘘じゃないよ。本当だ。だけど、貴方様が願った願いに問題があるんだよ」
「永遠の命の事か？　それのどこに問題がある？」
　心底解らないと首を傾げるその姿に魔女は深々と溜息を一つ吐いて、王様の願いに必要な対価を教えてあげる事にしました。
「愚かな王様、貴方様は願いが叶うのなら、対価に自分の命すら差し出せると仰いましたよね？　それに偽りは？」
「ふん、有る筈なかろう。必要なら幾らでも差し出してやる。だから余の願いを叶え」「られません」「何故だ！？」
「永遠の命を望むなら、対価に同等のものを必要とする。貴方様の命と同じモノ――となると、自然と貴方様の命を私に差し出す事になる。それじゃ永遠の命なんて与えられないでしょ」
　一息にここまで言い終えた魔女は小さく息を吐きだしてちらりと王様を見ました。その視線は「理解しました？しましたよね？してないと殺す」と無言で語っているようです。
　流石の王様もその視線を真っ向から受け止められないようで、僅かに顔をずらして唸りました。

5：愚かな王様が差し出した答え

　魔女の言い分も理解できます。命には命の対価で支払うべきと言うことは。しかし王様は自分の命を差し出したとしても新たに永遠の命を貰う形なのであれば、なんの問題も無いのではないか、と考えました。
　そして実際にそれを魔女に打ち明けますと魔女は呆れた様な視線で王様を射抜くばかり。更にはまた溜息を吐かれると言う自体に陥るのです。
「本当に貴方様は馬鹿なんだねぇ」
「……余のどこが馬鹿だと言うんだ？」
「全部だよ。と言うか、貴方様の言い分は矛盾してる。私は言った筈だよ？　永遠の命を願うなら同等の対価が必要だと」
「だから我が命をその対価として」「差し出されても無理！！」「……ッ」
　鋭い一喝の声に王様の言葉は遮られます。王様は思わずビクリ、と身体を振るわせましたが、すぐにそんな素振りは取っていないと思わせるように堂々とその胸を張りました。
　これでも一国の王、魔女であろうと弱みとなる様な姿は見せられぬと己の矜持を貫いたのです。
　しかし魔女は王様の態度を虚勢と取って鼻で笑います。ここまで滑稽だと笑いたくもなると言うもので、気分屋ながらも根は正直な魔女は己の感情を一つも隠さず見せつけます。
　王様はそんな魔女に苛立ちを覚えました。しかしここで下手を打ってしまえば己の願いは叶わない。それだけはどうしても避けたい王様。グッと己の手を強く握りしめて魔女の嘲笑を堪えました。
　そんな王様の姿に魔女は少しばかり関心を寄せたのか、気分を切り替えて口を開きます。
「いいかい？　よくお聞き、愚かな王様。己の命とは魂であり、魂は己の命である。これは理解できているよね？」
　物分かりの良くない子供に言い聞かせるように訥々と語り出す魔女。王様は魔女の言葉に頷きを返答として返します。
　魔女は満足げに笑みを一つ浮かべ、次いで、真剣な表情で王様の胸元――丁度心臓がある部分へと人差し指を突きつけました。
「永遠の命のベースとなる魂は貴方様の魂なんだ。それなのに対価として貴方様の魂を私が貰ってしまえば、ベースとなる魂が無くなってしまう」
「――つまり、余の魂を対価に支払うことは出来ない、と」
「その通りだよ、愚かな王様。そうなると自然と貴方様の願いも叶えられない――結論、無理な願いだとご理解いただけたかな？」
　ニッコリと微笑んで、わざとらしい程の仕草で恭しく首を傾げる魔女に対して、王様はギリギリと奥歯を噛みしめました。
　ここに至るまで王様は沢山の労力と時間を割いてきたのです。魔女の居場所を探す為に十年、見つけ出して追いかけるに至るまでに五年。その間、民から湧き上がる不満を暴力と言う名の権

力で押さえつけ、ようやっと、ようやっと魔女に直接会えたのです。
　永遠の命――それは王様が長年望み続けた願いでした。それさえ手に入れば、王様は永遠に王様として在る事が許されます。欲しいモノ全てが手に入る権力が永遠に許されるのです。
　なのに、対価を支払えないからとその夢が、長年の労力と時間があっさりと水に流されるなどあってはならないことなのです。
　そう考えるのが例え王様ただ一人だとしても、王様が考える事は絶対なのだと、その意見を押し通すのは眼に見えています。
　どうにかこうにか回復した従者達はこの後の展開に恐れ慄きました。王様の傍に仕えてウン十年。欲しいものに対して貪欲な王様の非道な行為は傍でずっと見て来たのです。きっと、そうきっと――その先を考える気力は無く、また、僅かな期待に掛けるように王様を見つめる彼らの視線は縋る様なものとして王様の背中をチクチク貫きます。
　しかし、悲しいかな、王様はやはり王様なのです。何かを思いついたかのように従者達を見て、魔女を見て、ニッコリと、それはいい笑顔を浮かべられました。
「魔女よ、我が魂で無くとも対価は支払えるぞ」
「……それは、誰の魂を指してるのかな？　愚かな王様」
「なに、余の魂が使えぬなら、我が臣下の魂を使えばいい」
「！！」
「臣下は余の物ぞ。余の物＝そやつらの魂も余の物だ。対価としては十分ではないか？」
「……」
　言葉が出ないとはこのことでしょうか。魔女は呆れを通り越して頭痛を通り越して眩暈を覚えました。従者達は僅かな期待を粉々に砕かれ、また、想像していた未来になってしまった事に顔から血の気を引き、真っ青に染めていきます。
　誰が好き好んで己の命を赤の他人の為に引き渡せましょうか。例えそれが彼らの主たる王様の命令であったとしても、やすやすと頷けるほど彼らの忠誠は王様にはありませんでした。
　王様はそんな事露知らず、これで願いは叶うと大喜びです。魔女を見つめる視線が早く早くとまるで子供の様に大人げなく急かしています。
この時、王様は何一つとして疑いませんでした。自分の願いが叶う現実を。魔女が拒否する未来を。臣下達を失ってでも欲する強い欲望の前に、眼が眩んでいたのです。

6：気分屋な魔女は帰宅を促す

「愚かな王様。貴方様はどうしてそこまでして永遠の命を望む？」
　魔女の淡々とした問いかけに、王様は何を今更、と言わんばかりの態度で語り出します。
「そんなもの、決まっておろう。余が王だからだ」
「王様だから？　それじゃ、王様じゃなければそんな事を望まない、と？」
「そうだ。余は王として生まれ、民の為に国の為に全てを捧げねばならん。だがな、余とて人間だ。全てを捧げて尽くしても足りぬ――時間が、足りぬのだ」
「……」
「そしてなによりも、王という立場の為に全ての時間を捧げるのは、アホらしいであろう？」
「……は？」
　この王様は何を言ってるんだ、と顔一面で語る魔女に気付かぬまま、王様は自分に酔いしれるように溜息を零します。
「生まれた時からの宿命とはいえ、余とて人間だ。やりたいこと、欲しいものがあって当然であろう？　しかし、王という立場故にそれがなかなか叶わぬ。……まぁ、大抵は権力に物言わせればどうとでもなるがな」
「ならそれでいいじゃん。それ以上を望んでも破綻しか待ち受けてないよ？」
「ふん、そんなもの、余の命が永遠に続けば簡単に覆せるわ。魔女よ、王の底力を舐めるでないぞ」
　自分の力に過信して、身の丈に合わない欲を抱いては破滅してきた人間を沢山見てきた魔女でしたから（強いて言うなら魔女自身もその一人と言えましょう）眉をひそめて王様に忠告をしました。
　しかし王様はそれに取り合わず、願いさえ叶えば問題ないのだと自信たっぷりに告げます。実際に逆境を乗り越えるだけの賢さは備えているのかもしれません。また粘り強さも同じくらいにはあるのかもしれません。
　王様としての底力と言われてしまえば納得できるような、できないような。魔女はどっちつかずの感想に顔を顰めます。そしてすぐにその感想を忘れてしまいました。
　魔女にとって人間の底力などどうでもいいのです。魔女自身が願いを叶えるに値するか、否か。それが問題なのですから。
「――で、結局貴方様は自分の時間の為に永遠の命を欲すると？」
「結論を言ってしまえばそうなるな。しかし自分の時間の為ではないぞ。あくまで王としての時間だ。魔女よ、そこを間違えてはならぬ」
「はいはい、失礼致しました」
　あくまでも「王」としてと念を押す王様。自身でもこの願いが自分の為と言う事を理解しているのでしょう。しかし、王様という立場を考えればそんなことを願うことは民に示しがつきません。そこで建前の「王」を強く口にしたのですが、魔女にはそれこそどうでもよかったのです。

　どうでもよくなかったのは王様に付いてきた従者達でしょう。王様の願いを知ってはいましたが、その願いを叶えた先まで知っていたわけではないのです。
　――ただ、知らぬとも想像することは出来ました。そしてその想像通りの答えを放った王様に対して従者達はいつ己の魂が奪われるのか怯えきっています。中には今にも気を失ってしまいそうなほど儚くなった者や、勇気振り絞り逃げ出す準備をする者がいる始末。それに気付かぬ王様の人望がここまで顕著に表われている様はなんとも滑稽と言えましょう。
　魔女はちらり、と従者達を見ました。従者達は各々肩を震わせ、誰もが魔女に視線を合わせようとしません。合わせてしまえばすぐにでも魂を奪われてしまうとその態度がありありと語っておりました。
　そこまであからさまに怯えなくても、と思わなくもない魔女でしたが、自分の命が掛かるとなると仕方ないことなのだろうと魔女は憐れみました。
　そんな二対の態度――と申し増すよりも、魔女一人の態度でしょうね――に焦れた王様は苛立たしく声を荒げました。
「えぇい、魔女よ、いい加減余の願いを叶えよ！！　対価は此処におる従者達の命だ！！　足りぬならまだ我が国にいる従者の命を幾らでも差し出すだから！！」
「無理だね」
「なっ！！」
「いや、正しくは無理、っていうわけじゃなくてお断り、かな」
　飄々と言ってのける魔女に王様の怒りは頂点を極めました。腰にぶら下げていた剣を抜き放ち、今にも魔女の首を刈り取ってしまいそうです。
　魔女はそれを冷めた眼で見つめるだけでした。恐怖の色を持たず、表情は楽しそうに笑んでいるのですから、寧ろ王様の方が追い詰められてしまっています。
「おやおや、逆上して私を殺しなさるかな？　愚かな王様はよほど哀れなお人のようだ。そこにいる従者達が哀れでならないよ」
　軽く肩を竦めて魔女は言いました。
「愚かな王様、私は貴方様の願いは叶えない。そう決めた今、どれだけの対価を差し出されようと、どれだけ命を脅されようと、私の答えは変わらないよ――さぁ、お帰りの時間だ。従者の皆様とご一緒に、お城へお帰り」
　そう言うや否や、魔女は中指と親指を擦り合わせてパチン、と音を鳴らしました。次の瞬間、魔女の眼の前に居た筈の王様と従者達は全員、その姿を消していました。

7：愚かな王様の暴挙が呼んだ展開

　魔女が指を鳴らす音を聞いた後、王様と従者達は気付けば自身の国の王宮内に倒れていました。誰もがいつの間に、と驚く中、王様だけが魔女に強制的に此処へと飛ばされたのだと気付きます。
「おのれ魔女め……余を虚仮（こけ）にしおって」
　ギリギリと歯噛みしながら、王様はすぐさま魔女を捕らえるようにと命を下しました。そしてその命が国内は愚か他国にまで行き渡る様にとも言葉を添えます。
　こうして魔女は王様に追われる身の上となり――十年の歳月を掛けて逃亡劇に幕を下ろす事になったのです。
　王様の眼の前に連れて来られた魔女は玉座に腰掛けている王様を見上げては恭しく一礼して見せました。
「これはこれは、愚かな王様ご機嫌麗しゅう――」
「ふん、ようやっと観念したか。魔女よ」
「はてさて、私が何を観念した、と？　世界中に生きて捕まえた者には賞金をやると回状を回して私の居場所を尽く奪い去ってきた貴方様が早々に観念してくだされば良かったものを」
「減らず口を叩くでない！！」
　朗々と語る様に紡がれる魔女の言葉を、ぴしゃりと一喝する王様。流石の魔女もその口を閉ざしました。
　あの日から十年という時を経てなおその権力を保ち続けた王様でございます。姿は老いても欲望は尽きぬのでしょう。
　また、魔女に強制的に王宮内へと移動させられたと言う事も王様の中では忘れられぬ屈辱として残っております。
　恨みと欲望、願望と憎しみ。四つの薄暗い感情に染められた瞳は昏く淀んでおりました。
　魔女は零れそうになる溜息を噛み殺し、改めて人間の欲深さに呆れ果ててしまうのです。
　王様は魔女を捕らえる事が出来た喜びから、悠然とした態度を崩さず玉座から立ち上がり、ゆっくりと魔女の傍へと向かいました。そしてあと三歩で眼の前に立つと言ったその距離から、王様は魔女に命令しました。
「さぁ、魔女よ。あの時叶え忘れた我が願い、叶えてもらおうか」
「叶え忘れたんじゃなくてお断りした筈なんだけど？」
「断ることなど許さん。そなたがどうしても叶えぬ場合――その首、切り落とすぞ」
　あの時とは違い、王様は剣を抜き放っておりません。しかし、その言葉通りの脅しが必ず実行されると魔女は感じておりました。
　ですが、魔女はそれでも恐れる事は無く、寧ろ呆れたように王様を見ます。そしてこう言いました。
「愚かな王様。命令すれば誰もが貴方様の言うことを聞くとでも？　勘違いしてはいけないよ？
　貴方様の言葉など、誰も聞いちゃいないのさ。聞いているのは、立場と言う大きな土台。貴方

様自身の声など、誰にも届きはしないのさ。勿論、私にも」
　優しく諭すような物言いは、どこまでも皮肉に満ちて歪んでいます。王様は怒りに震え、素早く抜き放った剣で言葉通り魔女の首を切り落としました。
　哀れかな。魔女はそのまま死んでしまいましたーーと思われましたが、切り落とされた首はふわりと浮かんだのです。
　その場にいた誰もが我が眼を疑いました。
「せっかちな王様だ。私を殺したいのであればそのような方法を取っても無理なのに」
　ふわふわと空中を漂う魔女の顔は呆れた様に笑います。倒れていた身体も両腕を地面につきながらその身を起こして、首の動きに従いました。肩をすくめ、両腕を使ってやれやれ、と呆れたポーズを取ったのです。
　兵士は恐怖に怯え、メイドは悲鳴を上げ、大臣は泡を吹いて倒れ、王様は顔面真っ青。魔女はそんな王様の顔の眼の前に浮遊して、軽く首を傾げました。
「ねぇ、愚かな王様。取引をしてあげようか？」
「と、取引、だと？」
「そう。取引。対価を貰う願いの叶え方ではないから、誰かの命を取る事はない。その代わり、私の願いを王様に叶えてもらう。要するにギブアンドテイク、だね。……実際に言ってみって気付いたけど、これって普通の叶え方とそう変わらないのかな？」
　傾げた首を反対側へと倒して悩む魔女でしたが、すぐにそんなことはどうでもいいと言わんばかりに王様に言葉の釘を一つさしました。
「ーーあぁ、取引内容を騙そうったってそうはいかないよ？　魔女の取引は契約も同じ。契約違反はーー死に繋がるからねぇ」
「……ッ……」
　息を呑んだ王様は言葉を無くして魔女を見つめます。魔女はそんな王様を面白いと思っているのか可笑しそうに見つめ返しながら、唄う様に言葉を語りました。

8：二人の取引の結末

「普通の叶え方なら本人の命は取らないんだけど、これは契約だからねぇ。その点だけ違うんだよ。別に難しい事じゃないだろう？　嘘を吐かず、私の願いを叶えてくればいいだけなんだから――あぁ、王様が願いを言う必要はないよ。貴方様の願いは知っているからね。何度も何度も言われたら耳にタコが出来るくらいあっさり覚えるものさ。だから私が今から言う願いを素直に叶えるだけでいい」
　そこで言葉を一度区切った魔女は、王様の態度を改めて確認するように見つめます。
　首だけの魔女の姿に竦んだ舌を上手く動かせない王様は、黙して魔女の取引内容を促しました。
魔女は鷹揚に一つ頷きを落とし、魔女が欲する願いを口にしました。
「なに、そんなに難しい願いではないさ。この王国から遠く遠く、西の彼方に存在する森を私におくれ。貴方様の権力ならどうとでもなろう？」
　ニッコリと可愛らしく微笑みながら、魔女は言葉を締めくくりました。
　魔女が口にした西の彼方に存在する森。王様はそれを脳裏に浮かべ、その土地を所有する国を思い出し、少しばかり頭が痛くなりました。
　その国とは友好関係にあると言えないのです。ですが、王様は魔女の言葉に首を縦に振ることしか出来ません。
　逆らえば取引は叶わない。それはつまり、自分の願いが叶わないも同義なのですから。どうしてもそれは避けたい王様。己の権力をいかに使ってその場所を奪い取るかの参段が密かに展開され始めました。
　魔女は物分かりのいい王様に満足そうに深く頷きます。
「私は今後森に入りこんだ者――特に私が認めた者の願いしか叶えない。本当は愚かな人間の願いを叶えること自体止めてしまいたいんだけど、それは許されないのさ」
　世知辛い世の中だねぇ、と溜息混じりに魔女はぼやきました。
　神様が嵌めた枷は魔女の首にまだ存在していますから、願いを叶えない、という選択肢は選ぶ事が出来ないのです。
　しかし、枷が外れたとしても魔女はきっと、自分が認めた者のみにその力を振るうのでしょう。
　一握りの感謝に絆されてしまった魔女ですから、定めた制約通りに動く事は予想に難くない事実でした。
「――さて、取引は成立したようだし、私はそろそろ行こうかな」
　魔女は自分の首を自分の身体へと繋ぎ合せて元通りの姿へと戻りました。そして終了した取引に合わせてその姿を消そうとするのですが、王様が慌てて魔女に声を掛けます。
「ま、待て！！　まだ余の願いを叶えておらぬではないか！！」
「うん？　あぁ、それはもう叶っているよ」
「……何？」

「取引に応じた時点で貴方様の願いは叶った、と言っているんだよ」
「それは誠か！？　おぉ、ついに、ついに我が命が念願の永遠を手に入れたとは……」
　ふるふると身体を歓喜に震わせては王様はその顔一面に喜色の色をのせました。望み続けた願いはようやっと叶ったのです。
　老いた分だけ感極まっているのでしょう、瞳から涙がボロボロと零れ落ちています。
「本当に、愚かな王様だねぇ」
　呆れたように、憐れむように、魔女は呟きました。
「永遠の命を望めども、それは魂のお話だと言うことに、その意味に気付く事は無いのだろう――気付いたところで後の祭りだけれど、まぁ、私には関係の無いお話さ」
　クスリ、小さく笑って魔女は全ての言葉を締めくくり、その姿を今度こそ消し去ってしまいました。
　魔女の呟きを耳にしていなかった王様は喜びのままに宴を催し、魔女との取引を確かなものとする為に、時刻より遠く遠く、西に広がる森を己が領地とし、且つ、魔女に与えた森だと明言されたそうです。
　魔女はその森に住み着き、森の中を迷い込んだ人間を観察、そして気に入った相手であるなら話を聞いて願いを叶えていくようになりました。
　願いを叶えてもらった者達はそれを自身の住まう街、村、国へと口伝えに残していきます。
　そうして広がった魔女のお話は言い伝えとなって長い長い時を語り継ぎ、嘘吐き少女の街に残っていたのです。

　さて、魔女のお話はこれでお終い。嘘吐き少女のお話の続きをまた始めましょう。
その前に、呟きを聞かなかった王様はどうなったのかって？
　それはまた、別のお話でございます。
　ここで語られることは無く、語られることがあるとしても、語り手は王様自身にお願いいたしましょう。
　なにせ王様は永遠の命をお持ちですから。自身の身の上に起こった事を忘れていない限りは、語ってくださることでしょう。
　たとえその身体が寿命と共に朽ち果てて、喋る口を無くしてしまっていたとしても問題はありません。
　永遠の命は終わる事を知らぬからこそ、永遠なのです。声亡き声で、語り紡いでくださることでしょう。

　その身に起きた、愚かな王様の人生を。

9：嘘吐き少女は森を彷徨う

　街道を越え、鬱蒼と生い茂る新緑の葉っぱが広がる森の前に少女は立っていました。言い伝えでは、この森の中の何処かに願いを叶えてくれる魔女がいるのです。
　ゴクリ、と唾を飲み込んだ少女は迷うことなく森の中へと足を踏み入れました。しかし、すぐに森の薄暗さに足を竦めてしまいます。
　街で体験した夜よりも深い闇は、まるで今にも少女を丸のみしてしまいそうなほど先が見えない暗さでした。
　少女は恐怖から涙をうっすら浮かべます。逃げ出したいと心の底から思いますけれど、首を横に振ってその気持ちを強く否定しました。
「駄目駄目、ここで逃げちゃったら、きっと魔女さんは私のお願い、叶えてくれないわ」
　手の甲で涙を無理矢理拭い、少女は震える足で森の奥へと進んで行きました。不安を抑え込むように右手で胸元を強く握りしめ、視線を彷徨わせながら歩き続けました。
　時折がさり、と左右上下のどこかの茂みが揺れる時があります。少女はその度に心臓がぴょんと跳ねる感覚を覚えますが、揺れた茂みからは何かが出てくる事は無く、ホッと胸を撫で下ろしていました。
　進む内に森の空気に慣れたのか、足の震えは徐々に納まり、今では自然な動作で歩く事が出来ています。
　少女の右手も力が抜けて、今では眼の前を遮る草や枝の葉を退かす為に動かしていました。
　少しずつ生まれた余裕が、少女の恐怖を溶かしていったのです。少女はそれに気付いていませんでした。気付かないまま、森の奥へ、奥へ、と足を運び続けています。
「魔女さん、いらっしゃいませんか？」
　森の中に住んでいるだろう動物達を驚かせないように、そして、狼や熊といった凶暴な動物に遭遇しないように、と小さな声で魔女へと呼びかけます。
　しかし魔女はその姿を少女の前に現す事はありませんでした。少女はがっくりと肩を落とし、また前に向かって足を進めていくのです。
　奥へ、奥へ、もっと奥へ。何処に居るのか解らない魔女を求めて少女は進み続けます。その足を止めるという考えがないと言わんばかりに。
「魔女さん、いらっしゃいませんか？」
　二度目の呼び掛け。結果はご覧のとおり、少女の眼の前にも、右にも、左にも、背後にも、魔女の姿はありません。
　少女はまたもやがっくりと肩を落とし、無意識に止まっていた足を動かそうとします。けれど、少女の足は動きません。疲れが酷く溜まっていたのです。
「もう少し、頑張って」
　少女は自分の足の疲れを解す様に撫でてやりながら一歩一歩、また歩み始めました。最初の頃よりも速度は一段と落ち込んでいますが、立ち止まるよりはいいと少女は思います。
　立ち止まって、歩けなくなって、前に進めなくなってしまうことが、少女にとって一番恐い事

でした。
　帰る家を無くし、縋れるような相手もいない。助けを求めようにも少女自身が紡いできた嘘の所為で、誰もが少女の声に耳を傾けてくれません。それどころか少女に声を掛けて手を差し伸べてくれるような人自体がいないのです。
　こればかりは少女の行いの結果なのですから、周りに文句は言えません。少女自身、それが解っていましたので、あの家にもう帰れないのだと悟った瞬間に街から出て行ったのです。
　嘘を吐き続けた少女は、ようやっと嘘が人を傷つける行いになるのだと気付きました。しかし、気付くのが遅すぎて、もう取り返しのつかない所まで来てしまっています。
　口癖のように紡いできた嘘は、少女の日課となって少女の中から消えません。きっとこの森の中で誰かに出会うことがあったのなら、少女は平然と同じ過ちを犯すでしょう。
　嘘を吐かずに生きていくことが、少女には出来ないのです。そして、嘘を吐いて傷つけて来た人達にちゃんと「ごめんなさい」を言う機会も、もう無くなってしまったのです。
「魔女さん、いらっしゃいませんか？」
　少女は魔女へと呼びかけます。しかしその声に答えてくれる声は無く、少女はまた、肩を落としながら森の奥深くへと足を進めていくのでした。
　森の中を彷徨う少女は気付きません。少女が森の中へと足を踏み入れた瞬間から、一つの視線が少女を追いかけている事に。その視線の持ち主こそが、森の中に住まう魔女であると言うことに。
　少女は気付かないまま、疲れきって足を動かす事が出来なくなるまで、森の中を彷徨い続けました。

10：気分屋な魔女の心は絆されて

　どれだけ森の中を彷徨ったのか、少女には分かりません。いつ自分が森の中に入ったのかは覚えているのですが、今日がいつなのかが分からないのです。
　薄暗い森の中に光はあまり差し込まず、昼だろうと夜だろうとその場の暗さにあまり差がないのです。
また、疲れ切った身体を休めながら少し回復したら歩き、疲れたら休み、回復したらまた歩き、の繰り返しをしていた少女なので、昼夜逆転したりしなかったりの差も激しかったのも要因の一つでしょう。
　ぐぅ、と少女のお腹が鳴ります。この森の中に入りこんでから少女はまともな食事を取っていません。身一つで街を出てきましたから、食糧など持っている筈も無く、ポケットを探ってようやっと見つけたキャンディ三個が少女のお腹の支えでした。
しかしそれもこの前休憩した時に最後の一個を食べて無くなってしまったので、食べる物はもうありません。
　森の中に生えている果物や草花はどれが食べられて、どれが食べてはいけないのかの区別が付きませんから、少女は手を伸ばせずにいます。
「お腹、空いた……」
　ポツリと零れた声は悲壮感漂うものでした。こんな時、帰るお家があれば、迎えてくれる家族がいれば、きっと沢山ご飯を食べられるのに――少女はそこまで考えてから首を横に振りました。
　力ないゆっくりとした動作から、少女にはもう殆ど体力も気力も残っていない事が分かります。
　それでも少女は魔女を探す事を諦めません。空腹を訴えるお腹を諌めながら、休んでも疲れが取れなくなった足を引きずる様にして少女は森の中を歩き出しました。
　しかし、運悪く踏み出した一歩が土の上に盛り上がっていた大きな木の根に引っかかってしまい、少女は盛大に転げてしまいました。
「キャッ！！」
　小さな悲鳴が少女の口から飛び出します。力の抜け切った身体では上手く受け身を取る事が出来ず、少女は顔面から思い切り地面へと叩きつけられる形になってしまいました。
「い、痛い……」
　強く打ちつけた顔からじんわりと滲むように広がる痛みに少女の瞳には涙が自然と広がります。
　歯を食いしばって涙を零さないようにする少女でしたが――ほろり―――一歩遅かったようで、涙が一粒、頬を伝いました。
　戦慄く唇をギュッと噛みしめて、せめて声だけは、と少女は嗚咽を噛み殺しました。その間にもほろり、ほろり、涙は幾筋にもなって頬を伝い落ちていきます。
　苦しくて、辛くて、痛くて――少女は耐えきれないと言わんばかりに泣きました。

転んでしまった事で自覚しながらも見て見ぬフリを続けた身体の疲れや極限の空腹が限界を訴え、何より、一向に見つからない魔女の姿を追い求める気力が完全に潰れてしまったのです。
　少女の身体と心はもうボロボロでした。一人で立ち上がる事が出来ないくらいに、疲れ切ってしまいました。
　噛みしめていた唇はいつの間にか開かれ、大きな泣き声を上げています。少女はわんわん泣いて、泣いて、泣いて――泣き疲れて、そのまま眠ってしまいました。
「おやおや、こんな所で眠ってしまったら危ないんだけどねぇ」
　少女の頭上から声がポツリと落ちてきます。そして次の瞬間、少女の傍に魔女が立っていました。
　倒れたままの少女の後頭部をジィ、と見つめる魔女でしたが、少女が森の中に入ったその瞬間から、少女の姿を見つめていたのです。
　この森には魔女の結界が一面に張られています。結界の役目は魔女と森に住まう動物達といった住人以外の存在が入りこんだ時に魔女に知らせる事です。
　魔女はその結界に触れて森の中に入った少女をずっと観察していました。彷徨いながら自分を呼ぶ声を耳にしていましたけれど、魔女は基本気分屋ですから、呼ばれただけでは姿を現しません。
　そうしている間に少女はこの森を出ていくだろうと思っていたのですが、少女は森を出ていくどころか奥へ奥へを突き進んでいくではありませんか。その姿に流石に驚いて、魔女は暫し少女に同行していたのです。
　勿論少女に気付かれるような真似は一切せず、遠くから見守るだけ。そして少女に手を出さないように、とお願いしたり危ない方へ進んでしまいそうな時には魔力を使って少女を安全な場所まで引き戻したりと色々と世話を焼いてあげていました。
　何故自分がここまでするのか、魔女は不思議でなりませんでした。しかし、よくよく考えると分かることなのです。
　少女がどれだけ苦しくとも、辛くとも、諦める事をせず自分を求める姿に魔女はいつの間にか心を絆されていたという事実に。
「これも乗り掛かった船、というべきなのかな？」
　そう言った魔女の眼差しはとても優しく、普段人間を見つめる視線とは一切違ったものでした。

11：気分屋な魔女の無意識の行動

　魔女はあれから少女を所謂お姫様だっこの状態で家へと運びました。丁度少女が倒れたその場所から程遠くない場所にありましたので、魔力を使うこと無く歩いて向かいます。
　その道中、魔女は少女の身体が軽すぎる事に気付きました。そしてその原因が空腹であるという事も。
　姿を見せずに見守るだけの魔女でしたから、少女の為に食事を用意することなどできません。また、食べられる果物や草花のある場所へとそれとなく誘導しても、少女自身がその知識を持ち合わせていないので、どれだけ空腹にお腹を鳴らそうとも手を伸ばす事はありませんでした。
　歯噛みしたい気持ちになるのはお門違いというもので、実際に抱え上げて少女の身体の軽さを実感してしまうとすぐに姿を現さなかった事を魔女は後悔します。
「――とりあえず、この後悔を償う為にもまずは家に運ばないと」
　そう言うや否や魔女は歩く速度を上げて森の奥に建てられた小さな家へと向かうのでした。
――数分後、辿りついた家の玄関前に魔女は立ちました。すると扉が自然と魔女を歓迎するように勝手に開かれたのです。
　流石は魔女の家と言ったところでしょうか。部屋の中に一歩足を踏み入れれば自動的に部屋全体が明るくなり、暖炉に火が灯されるのですから。
　まず魔女は少女を自分の部屋へと連れていきます。そして普段使っているベットの上へと寝かせました。
　改めて真上から少女の姿を確認した魔女は、中指と親指を擦り合わせるようにしてパチン、と音を鳴らします。
　すると、一瞬にして少女の身体から汚れや先程転んで出来た傷、これまで負ってきた古傷等、全てが見事に無くなってしまったのです。
「身体の組織の事を考えれば自然と治すのが一番いいんだろうけど、まぁ、今回は眼をつむってもらおうか。対価として古傷も頂いたわけだし」
　少女にとってはいいこと尽くめだ、と魔女の観点から勝手に古傷を対価に魔力を行使した結果でした。
　次に魔女は少女の服を脱がせ、身体に巻かれている今となっては不必要な包帯を外し、魔女が持っている服へと着替えさせてやります。
　しかし少女と魔女とでは体格が違いすぎるのか、上着一つだけで少女の体はすっぽり綺麗に納まってしまいました。
「この辺はやっぱり性別の違い（…）かね？」
　小さく零した呟きになにやら不穏な言葉が混ざっていたように思いますが、この場所は魔女の家の中。生きている人間は少女と魔女のたった二人でしたので（少女に関しては現在眠っております）誰にも突っ込まれること無く流されてしまうのでした。
　魔女は少女の身体が冷えないようにと掛け布団を身体の上に掛けてやってから傍を離れます。
　離れる瞬間にポンポン、と軽く少女の頭を撫でる仕草を取ったのは無意識のようです。

　それに気付いた魔女は己の手をまじまじと見つめた後、苦笑いを零しました。
「やれやれ、私は一体何をしたいんだろうね」
　ぼやいた言葉は実に魔女らしくない行動だと自分を責めているようです。
　これがただの気紛れだと言うのであれば、それこそ気分屋な魔女としてのいつもの行動だと感じられるでしょう。
　けれど、今回の行動は別でした。少女に絆された部分があるとはいえ、対価を勝手に貰って怪我や汚れを魔力で綺麗さっぱり消し去ったり、性別の違う年頃の異性（…）の服を脱がせて着替えさせたり（しかも自分の服を、です）更には今から少女の為の食事を用意しようというのですから。
　魔女をよく知る神様や、願いを叶えてくれと縋ってきた多くの人間、そして愚かな王様が見たら眼を引ん剥いて驚く事でしょう。
「お前は一体誰だ！？」
　そう言われても可笑しくない、寧ろ、魔女本人がそう言ってやりたいくらいにあり得ない現状です。
　魔女は眠る少女を見つめました。その寝顔に涙の痛々しい痕は無く――怪我を治した時に一緒にその痕も治してしまったようです――静かな寝息を立てています。
　穏やかな様子に安堵する魔女の心。絆されるとはこういうことなのか、と魔女は不思議な感覚に戸惑いながらも、少女が目覚めてすぐ食べられるように、とキッチンへと足を向けました。
「何にも飲まず食わずだったから、すぐに固形のものと言うよりはスープとかの飲みこみやすい物のほうがいいかな？」
　ブツブツ呟きながら向かうその背中を、微睡みから意識を浮上させた少女の瞳が捕らえていた事に、気分屋の魔女は気付く事はありませんでした。

12：嘘吐き少女は夢に囚われて

　少女は夢を見ていました。真っ白な場所にぽつんと一人立っている夢を。一人その場所で留まるにはどうしても恐くて、少女はその場から動きだそうとします。けれど、足は言う事を聞いてくれません。
　どんなに頑張っても、どんなに脳が命令を下しても、少女の足は一歩も前にも後ろにも右にも左にも動きはしなかったのです。
「どうして？　ねぇ、動いてよ。此処に居たくないのに」
　焦る少女の言葉など聞こえないと言わんばかりの足の態度に少女はなすすべなく、立ち尽くしたままでした。
　そんな少女の眼の前を一つの影が通り過ぎて行きました。最初はハッキリと視認できませんでしたが、何度も何度も眼の前を通り過ぎていく影を見つめているうちに、姿がくっきりと少女の眼に映るようになっていきます。
　少女は息を呑みました。動けないでいる少女の眼の前を通り過ぎていくその影達は全て、あの街の住人だったのです。
　近所のお爺さん、畑仕事に向かうお婆さん、仕事場へと急ぐお兄さん、お出掛けするお姉さん、少女のお祖母さん、少女のお祖父さん。
　誰もが少女の記憶する、少女の知っている人達ばかりだったのです。
　少女は咄嗟に声を上げました。
「ねぇ、待って！！　私も一緒に行きたいの！！　置いて行かないで！！」
　懸命に声を張り上げ、自分の存在を主張しますがその声は誰の耳にも届かず、一人、また一人と消えていきます。
　少女はその現実にどうして、と思った瞬間に自分が行ってきた行為を思い出します。
　沢山の嘘を吐いて傷つけて、迷惑を掛けて、挙句の果てには家族を泣かして。そんな少女の声が届く筈はないのだと、届いても無視されるのがオチなのだと、少女は喋ることを止めました。
　一人、また一人と眼の前を過る人達をただ見つめているだけの少女。頬を伝う涙に気付かぬまま、自分のした行為の結果を見つめるのでした。
「ごめんなさい、なんて……もう、遅いよね」
　ポツリ、呟いた声すら届かないのでしょう。誰も足を止める素振りを見せないのですから。
　けれど、そんな少女の前に足を止める人物が二人いました。少女は誰だろう、と不思議そうに視線を向けるのですが――そこに居た人物達に少女は声を失ったのです。
　少女の眼の前に立っていたのは男の人と女の人でした。二人は夫婦なのか、仲良く寄り添って少女を見つめています。
　よくよく見れば二人は少女にどこかしら似ているように思います。いえ、少女が二人に似ていると言うべきなのでしょうか。
　少女は二人の姿を食い入るように見つめ、二人は少女に微笑みかけました。
「貴方は独りぼっちで此処に居るのね」

「でもそれは仕方ないことさ。沢山の嘘を吐いた罰なのだから」
「だから、私達も一緒に居られないの」
「だけど忘れてはいけないよ？　お前の嘘は大切な人の為に紡がれた、優しい「嘘」だということを」
「「それじゃ、さようなら――――」」
　女の人と男の人、交互に紡がれる言葉は少女の心を突き刺していきます。けれど、男の人が紡いだ言葉の意味が分からず、それを問いかけようとした瞬間、二人同時に紡がれた別れの言葉を聞いて、少女は咄嗟に声を張り上げました。
「待って、行かないで！！　私を置いて行かないで――」
　その先の言葉を紡ぐ前に消えてしまった二人。少女は動かぬ足を恨みました。伸ばしたけれど掴むことすらできなかった己の手を憎みました。
「嫌だよ、私は此処に居たくないの。一人で居たくないの。ねぇ、お願い、お願いだから……置いて、行かないで……」
　ボロボロと零れる涙は少女の悲しみにそっと寄り添います。しゃくりあげる喉は上手く言葉を出せず、つっかえつっかえになりながら「嫌だよ、嫌だよ、」と言葉を繰り返すばかり。
　少女はとうとうその場にしゃがみこんで両膝を抱え、その中に顔を埋めて泣きじゃくりました。
　そうして眼に見える全てを拒絶してしまった少女は本当に、独りぼっちになってしまい――ました、と続く所を掬いあげた一つの温もりが、ありました。
「……誰？」
　ポンポンと、少女の頭を撫でるように叩いて行った優しい手。誰の手か分からぬそれを、少女は咄嗟に求めたのです。
　するとどうした事でしょう。今の今まで動かなかった足がすんなり動いたのです。少女はそれに驚きながらも動くのなら今しかない、とその場を走りだしました。只管真っ直ぐに走って、走って、走って――気付けば眼の前に迫りくる光の中へとその身を投じていたのです。
　眩しさに眼を眩ませ、少女はそのまま意識を失いました。そして次に目覚めた瞬間、少女は微睡みの中、誰かの背中をその瞳にうつしたのです。

13：嘘吐き少女は魔女に笑われる

　微睡みに揺れる瞳を瞬いて、少女はしっかりと眼を覚ましました。次の瞬間、ハッとしたように思い切り身体を起こして――全身に走ると思われた痛みが無い事に首を傾げました。
「どうして？　私、確か転んだ筈じゃ……」
　混乱したまま自分の身体を見下す少女。いつの間にか着替えさせられている服装はぶかぶかで、あまり少女の身体にはフィットしていません。
少女は怪我をしていた筈の両腕や顔、身体をペタペタと両手で触っては傷跡が無い事に驚きを露わにしました。
古傷を隠していた筈の包帯まで消えているとは思わず、ついまじまじと己の両腕を見つめます。
自分の嘘を聞いて欲しくて、怪我をしてでも足を止めていたその証拠が――罪の印がない事に不安を覚えます。
　消した魔女当人からすればいい事をした筈なのですが、少女にとっては違ったようです。
自分自身の確認を終えると、少女は視線をキョロキョロと動かしました。
　まずベットの横に置かれたサイドテーブルが目に入ります。次に小さな窓に大きな机、そして所狭しと壁に沿って並ぶ本棚の数々。全て少女には見覚えのない風景です。
　少女は自分が今いる場所がどこかの家の中だと理解しました。そしてあの時転んでしまって泣いてしまった後、少女はそのまま泣き疲れて眠ってしまったのだと想像が付き、とても恥ずかしくなりました。
「でも、一体誰が私を此処に運んでくれたんだろう？」
　意識を失う前までいたのは森の中ので。それが気付けば家の中、となると、少女以外の誰かが森の中にいたという事で。
　でも一体誰が少女を助けてくれると言うのでしょうか。
　少女は先程まで見ていた夢を思い出し、表情を翳らせました。嘘ばかり吐いてきた少女を見る人は誰一人としていません。少女の嘘吐きは有名でしたから、あの街にいる人間は絶対に少女に手を差し伸べることはおろか、命を助けてくれる人もいないでしょう。悲しいですけれど、それが少女の吐いた嘘の対価なのです。自業自得とも言えましょう。
　そんな少女を助けてくれたとなると、きっとあの街の人間ではないのでしょう。そして魔女のいる森に用のある人間となると――ふと、少女は一つの可能性を閃きました。
　もしかして、いやしかし、だけどそう考えるとつじつまが合う。一人悶々と悩んでいたその時、部屋の扉が音を立てて開きました。
　少女は慌ててそちらへと視線を向けます。そこにいたのはお盆を抱えたとても美しい人でした。
　艶やかな黒髪、黒曜石の様に煌めく瞳、透き通るような白い肌、紅く色づいた唇、細みの肉体――美麗の全てを詰め合わせたようなその姿に、少女は知らず知らず感嘆の溜息を零しては見惚れます。
　少女の様な態度に慣れっこなのでしょう。その人は目覚めていた少女に驚きを見せはしても視

線や溜息にたじろぐ様子は見せません。
　ニッコリと微笑んでその人は口を開きます。
「眼、覚めたんだ？」
「は、はい……あの、私を助けてくれたのは貴方、ですか？」
「そうだよ。というか、私以外にこの家に住んでる奴はいないし、森の中にもいないからねぇ。消去法を取るまでもなく私が君を助けた、と言うけど……助けられるのは君にとって困った事だったかな？」
「いえ、そんなこと無いです！！　助けてもらえて凄く助かりました！！」
　やはり少女を助けてくれたのは眼の前の人の様でした。しかし本当にそうなのかどうかを判断する為に問いかけた返答はまさかの返事付きで返されてしまい、少女は慌てて首を横に振って否定しました。
　そして同時にグゥ、とお腹が鳴きます。誰の音かなんて確認せずとも一目瞭然。硬直した少女の顔は真っ赤に染まり、同じく硬直した少女の恩人は笑いを堪えるように少女から顔をそむけました。
　少女は恥ずかしそうにお腹を抱えながら恩人を睨みつけます。そして小さくボソリと呟きました。
「可笑しいなら、笑ってくださって構いません。堪えられる方が余計恥ずかしいですから……」
「そう？　なら、お言葉に甘えて笑わせてもらおうかな」
　そう言って恩人は本人の許しがあるなら、と遠慮なく盛大に笑いだしました。まさか本当に思い切り笑われるとは思わず少女はポカン、とした表情で恩人を見つめ――つられるように少女も笑いだしました。
　部屋の中に響き渡る二人の笑い声。恩人の声は低く、少女の声は高く。まるでハーモニーを奏でるように重なり合っていきます。
　少女はこんなにもお腹の底から笑うのは久しぶりでした。しかも原因が自分のお腹の鳴る音なのですから余計に笑えて仕方ありません。そしてそんな少女を見つめる恩人も、こんなに面白いと笑うのは初めての経験で。
　二人は疲れて自然と声が嗄れてしまうまで、その笑い声を止めることはありませんでした。

14：嘘吐き少女の切なる願い

　ようやく笑い声が嗄れて、普段通りに話す事が出来るようになったのはあれから数分後の事です。長いようで短い、短いようで長いその時間を二人は思いきり笑いに費やしました。
　その結果、少女は起こした上半身を前へと折り畳み、恩人は器用にお盆を抱えたまま若干前のめりになる形で息を整える事になったのです。
　笑い終わった後は互いの雰囲気が適度に解れ、穏やかな様子を覗かせながら改めて会話は始まりました。
「あー、笑った笑った。私、こんなに笑ったの初めてだよ」
「私も初めて……というか、随分久しぶりです。しかも原因がお腹の鳴る音とか、恥ずかしすぎてもう……」
「ふふ、そんな君に――はい、これをプレゼント」
　恩人が差し出したのは抱えていたお盆――の上に乗せられた一枚の深皿でした。熱いだろうから、と実際にはお盆のまま渡されたそれを受け取り、お皿の中を覗き込みました。中身は美味しそうなリゾットです。
　途端、グゥ、とまた鳴る少女のお腹。二人して一瞬固まった後、顔を見合わせて小さく笑い合いました。
「お腹空いてるんでしょ。遠慮なくそれ食べてよ」
「ありがとうございます。でも、本当にいいんですか？」
「いいって。元々君の為に作ったんだし、食べて貰わないと正直困るんだがね？」
「え？　……私の、為？」
「そう。此処まで君を運んだのが私だってのはもう解ってるんだろ？　その時抱えた身体が軽すぎたから、空腹で倒れたのかと思ってね。……あ、もしかしてリゾットは苦手だった？」
「いえ、そんなことは全然！！　あの、ありがとうございます。いただきます」
　恩人の気遣いに少女は心から嬉しそうな笑顔を零します。倒れていた理由は違うけれど、それは言う必要はないでしょう。
　少女を此処まで運んだと言うのであれば、少女が泣いていた事には気付いているでしょうから。
　しかしそれを伝えずに身体の軽さから連想された空腹をメインに言葉を濁してくれた恩人の優しさに、少女は心を震わせていました。
　少女はお盆の上に置かれたスプーンを手に取り、リゾットを一掬い。熱を冷ます様に息を吹きかけて、パクリ。もぐもぐと咀嚼する様子を恩人は息を呑んで見守ります。
　ゴクリ、と嚥下された少女の喉。恩人は恐る恐る声を掛けました。
「どう？　美味しい？」
「はい。凄く、美味しいです」
　ニッコリと可愛らしく笑った少女に恩人は安心したように全身の力を抜きました。意外と緊張していたご様子。気付かぬうちに握りしめていたらしい右手に気付いてこっそりと苦笑いを零し

ます。
　その後、少女は時間を掛けて用意してもらったリゾットを完食しました。
「ごちそうさまです」
「お粗末さまでした」
　綺麗になった空の器に満足そうに頷きを落とした恩人は、自身でそれを運ぶのが面倒だったのでしょう。中指と親指を擦り合わせて、パチンと鳴らします。すると、少女の膝の上に乗せられていた筈のお盆が一瞬にして消え去りました。
　眼の前の出来事に少女は唖然とします。恩人はそんな少女に気付かず、机に備え付けられている椅子を引っ張って持ってきて、少女のベットの傍に置きました。そして自身はそこに腰掛けました。
「さて、これからの事を話さないとだねぇ」
　のんびりとそんな言葉を切りだした恩人に、少女はようやく自分を取り戻したようです。
　あの、と前置きを一つしてから、目覚めた時に浮かんだ一つの可能性をここで口にしました。
「あの、貴方はもしかして――魔女、なんですか？」
　少女はドキドキと高鳴る煩い心臓を押さえるように胸元を強く握りしめました。眼の前で一瞬にして消えたお盆と器――あれは普通の人間には出来ない芸当です。それを軽々とやってのけた恩人はきっと――
「あぁ、その通りだよ。私が言い伝えに残る魔女――気分屋な魔女だよ」
　悩む間もなくさらりと告げられた恩人――魔女の一言に少女はいてもたってもいられずしがみつきました。
　まさかそんな行動に出られるとは思わなかった魔女は咄嗟に足を踏ん張る形で少女を抱きとめます。
魔女の戸惑いに気付かぬまま、少女は大きな声で願いを口にしました。
「お願い！！　貴方の力でどうか、私の声を奪って！！」
　放たれた願いに眼を見開いた魔女でしたが、少女の必死な想いが表われる瞳に見入ってしまいました。
　少女のような瞳をする人間を魔女はよく知っています。願いを叶えて欲しくて、その為の対価に己の命と言われても迷わず差し出せる人間の眼――少女の瞳はそれと同じでした。
　魔女は真剣な表情で少女に問いかけます。
「どうしてそれを願う？　声を奪ってしまえば喋れなくなると言うのに」
「それでいいの。私はもう、喋りたくない。私が喋ったら喋った分だけ――大切なものを失うばかりなんですもの」
　少女は魔女の瞳を見つめながら語り出しました。
　少女が些細な「嘘」から「死」に関する「嘘」を吐きだす様になった、その切っ掛けのお話を。

15：嘘吐き少女の始まりは

　それは、少女がまだ幼い頃のお話です。

　小さな頃から嘘吐きな少女は、些細な可愛い嘘を吐く事が好きでした。
「お父さん、お父さん」
「ん？　なんだい？」
「あのね、お母さんがお父さんの事呼んでたよ」
「そうなのか。ありがとう。教えてくれて。……お母さんは今何処にいるんだい？」
「えっとね、裏庭！！」
　元気よく居場所を告げた少女は「ちゃんと伝えられたよ、偉い？」と視線でお父さんに問いかけます。お父さんは我が子可愛さに堪らずギュウ、と少女を抱きしめました。
　少女はきゃあ、と大喜び。嬉しそうにお父さんを抱きしめ返して、二人はそのまま別れました。
「お母さん、お母さん」
「あら、どうしたの？」
「あのね、お父さんがお母さんの事呼んでたよ」
「そうなの？　あの人ったら、一体何の用かしら？　ねぇ、お父さんは何処にいるか分かるかしら？」
「えっとね、書斎にいるって伝えてくれって」
　書斎という言葉が難しいのか、可愛らしい顔を顰めて、たどたどしく少女は言葉にしました。お母さんはよく言えました、と言わんばかりに少女の頭を優しく撫でてから、書斎へと足を運びました。少女はお母さんの背中を見送ってから、ニンマリと笑います。
　――数十分後、少女はお父さんとお母さんに呼び出されました。
「お父さん、お母さん、なぁに？」
「こら、またお父さんとお母さんに嘘吐いたでしょ？」
「駄目だぞ、嘘なんて吐いちゃ」
　お母さんとお父さんに叱られてしまった少女ですが、それでもニコニコと楽しげに笑っています。
　少女は嘘を吐いて困る人達の顔を見るのが大好きだったのです。悪戯好きと言ってしまえばそれまでなのですが、少女はこうして嘘を吐いた後、叱られる形であっても自分に構ってくれると言うことが嬉しかったのです。
　要するに、少女は寂しがり屋なのでした。
　お父さんとお母さんは少女が寂しがり屋なのを知っていますから、こうして嘘を吐かれて怒る事をした後は時間の許す限り少女を甘やかします。
　少女はその甘やかしが大好きで、余計に嘘を重ねてしまうのですが、吐いていい嘘、悪い嘘の

区別を無意識のうちにしているようで、大事に至る様な嘘は一切吐きませんでした。
　ある日のことです。お父さんが少女を自分の元へと呼んで、大事なお話をしてくれました。
「いいか？　嘘を吐くのは大切な人の為にだけ吐きなさい」
「大切な人の為？」
「そうだよ。嘘と言うのはね、どんな形であれ、誰かを必ず傷つけて悲しませるんだ。今はまだ可愛らしい嘘だと分かっていて、お前を甘やかしてくれるけど、大きくなったらそれは通用しない」
「……」
「だから、お前が今後も嘘を吐くと言う場合は、大切な人の為にだけ、その嘘を使いなさい」
　真剣な顔で、真剣な声で、お父さんは少女に語りかけます。しかし少女はまだ幼くて、全ての意味を理解することは出来ません。
　それでも少女は大好きなお父さんが言う、大事なお話なのだと言うことはちゃんと理解しています。忘れてはいけないことなのだと言う事も肌で感じ取っているのでしょう。
　ジィ、とまん丸の瞳でお父さんを見つめ、少女は問いかけました。
「大事な人に吐く嘘なら、大切な人は傷つかないの？　悲しまないの？」
　嘘を吐くと言う行為が誰かを傷つけたり、悲しませるということはちゃんと解ります。少女が他愛ない嘘で皆を騙した時にいつも最後に「もう二度と言ってはいけないよ？　それは相手を傷つけてしまうからね」と諭してくれていました。
　ですがお父さんの言い分では、大事な嘘は大切な人を傷つけない、悲しませないと言っているように聞こえたのです。
　もしそうなのなら少女は大切な人にだけ嘘を吐きたいと思いました。誰かを傷つけたり、悲しませたり、そんなことは少女だってしたくないのです。
　けれどお父さんはどこか悲しそうに笑って少女を見つめました。
「いいや、大切な人の為に吐く嘘も、大切な人を傷つけて悲しませてしまうよ」
「そうなの？　ならどうして、お父さんは大切な人にだけ嘘を使いなさいって言うの？　傷つけたり、悲しませたりしちゃ、駄目なんじゃないの？」
「そうだね。大切な人を傷つけたり、悲しませたりしちゃいけない。だけどね、嘘というのは時に必要な時があるんだ。その必要な時に吐いてしまう嘘は、とても優しい嘘で、大切な人の心を守ってくれる力を持っているんだ」
　お父さんはそこまで言って、一度言葉を区切ります。幼い我が子に伝えるにはどう言ったいいのか、言葉を沢山選んで、悩んで、一つ一つ大切に紡いでいくのです。
「嘘を吐かれたその瞬間は、きっと傷つくだろう。悲しむだろう。大切な人に言われた嘘なら尚更。だけど――その「嘘」があったから、大切な人は幸せになれるんだ」
　お父さんは微笑んで、少女の頭を優しく撫でます。どうか伝わりますように、そんな願いを込めて。

16：両親の切なる願い

「傷つけてしまう嘘であり、悲しませてしまう嘘でもあるけれど――その嘘に込めた本当の想いが伝わった瞬間、大切な人は幸せになれるんだよ。だから、お前も大きくなってからも嘘を吐き続けると言うのなら、大切な人の為だけに嘘を吐きなさい。そして覚悟するんだ。その「嘘」は大切な人を傷つける、悲しませると言う覚悟を。それが出来ないのなら、嘘を吐いてはいけないよ。中途半端な「覚悟」で吐いた嘘は大切な人だけでなく、自分も傷つける嘘になるからね」
　優しい手つきで撫でられる頭の感触に、少女はうとうとと船を漕ぎ始めます。元々お父さんのお話が長くなりすぎていた事もあり、少女は大事なお話だと解っていながらも睡魔に勝てずに眠ってしまいました。
　お父さんがそれに気付くのは全て話し終えた後。こてり、と身体を預けてすやすやと眠る我が子を見て、眼を見開きます。しかし浮かぶのは怒りではなく慈しみなのです。
　お話の終わりを見計らって傍に寄って来たお母さんはブランケットを片手に持っていました。
　お父さんはそれに微笑みを浮かべてお母さんを見つめます。
「すまないな。助かるよ」
「どういたしまして。……それにしても、ぐっすり眠ってるわね」
「あぁ。本当だな」
「……この子は将来、どんな大人になるのかしら？　嘘を吐く事に慣れてしまうような事だけは、避けてほしいわね」
　ブランケットを少女の身体に掛けてやりながら、お母さんは小さな声でお父さんに話しかけます。お父さんはそれに頷きながら、優しい仕草で少女の頭を撫でていました。
「きっと大丈夫だよ。途中までだが、ちゃんと話を聞いていたようだし、何より僕達の子供だ。そんな悲しい大人にはならないさ」
「……えぇ、そうね。きっとそうにきまってるわ」
　お母さんはそっと、お父さんへと寄り添います。お父さんもそんなお母さんを抱き寄せて、その頬に口付けを落としました。
　二人はすやすやと眠る我が子へと視線を落としました。安らかな寝顔を見せる可愛い娘。嘘吐きなのは構って欲しい合図だと、一体どれだけの人が気付くでしょう。きっと気付いてくれる事は少ない筈です。
その事で少女が傷つく未来が来なければいいと、二人は心から願っていました。
「願わくば、この子が「嘘」に囚われて独りぼっちにならない事を……」
　お父さんは小さく祈りを捧げました。その声が神様に届いたかどうかは解りません。けれど――叶わぬ願いとなってしまう未来を少女が選んでしまうことに、その時の二人は知る由も無かったのでした。
　それから数日後の事です。少女は大好きなお父さんとお母さんと喧嘩してしまいました。喧嘩と言っても少女が一方的に駄々をこねただけなのですが、少女にとっては立派な喧嘩でした。
　その内容はと言うと、ずっと前から約束していたお出掛けが、当日になってお父さんもお母さ

んも仕事が入ってしまっていけなくなってしまったと言うことです。
　それを申し訳なさそうに告げられた少女は期待に輝かせていた瞳を一瞬にして怒りに染め上げました。
「いや！！」
「あぁ、本当にすまない。約束を破りたくはないんだが、今回ばかりはどうしても……」
「いや！！　なんで、どうして？　私との約束の方が先だったよ！？　それなのにどうしてお父さんもお母さんもお仕事に行っちゃうの！？」
「それは……」
　少女が今日と言う日を心の底から楽しみにしていた事を嫌と言うほど知っていた二人でしたから、少女にどうして仕事を優先するのかと聞かれてしまうと何も言えなくなってしまいます。
　口籠って何も言わないお父さんとお母さんに、少女はとうとう家を飛び出してしまいました。
「約束を破るお父さんとお母さんなんて大嫌い！！　そんな二人なんていなくなっちゃえばいいんだ！！」
　怒りにまかせて放った少女の捨て台詞。その時は本当にそう思っていた言葉だったかもしれません。けれど、怒っていたからこその言葉だったんです。本気でそうなればいいなんて、少女は一切思っていなかったのですから。
　しかし紡いでしまった言葉は取り返しがつきません。紡いだその瞬間に少女が我に返って撤回するか、謝罪するかして流してしまえばまた話は違うのでしょう。
　けれど少女は家を飛び出してしまいました。その際に紡いだその言葉が、後々少女を永遠に苦しめる事になるとも知らないまま。
「ひっ、く……ぐす、…ひっく……」
　家を飛び出した少女は街の中を一人彷徨います。ぐずぐずと鼻を鳴らしながら、ぽろぽろ零れる涙を両手でぐしぐしと拭うのですが、止まらない涙は少女の両手をびしょびしょに濡らしてしまうばかりで意味をなしません。
　それでも少女は懸命に涙を拭います。泣き続けていてはいけないと、幼いながらに考えたのです。
　もしこんな風に泣いている所を見られたら、きっと誰かに心配を掛けてしまうでしょう。少女はそうなることを恐れました。

17：嘘吐き少女のお出迎え

　嘘を吐く事には慣れているのに、心配を掛けてしまう事には慣れていないのです。なんとも変わった少女ではありますが、心配を掛けると言うことはその人を悲しませると言うことだと受け止めていました。
　少女は誰かを悲しませるのは嫌いです。泣かれてしまうと少女も悲しくなってしまいますから。
　では少女が紡ぐ嘘はどうなんだ、と言われてしまいますとなんとも言えないのですが、少女にとってそれは既に構って欲しいのサインになっているのです。
　ですから、嘘を吐くこと＝悲しませる、ではなく、嘘を吐く＝構ってほしい、という構図が出来上がります。
　どこまでも風変わりな少女は、街の中央に設置されている噴水の前まで来ると、その近くに設置されているベンチへと腰掛けました。
「涙さん、いなくなっちゃった」
　泣きすぎて掠れてしまった声でポツリと少女は呟きました。その頬に幾筋もの涙の痕はありますが、確かに涙は無事にいなくなってしまったようです。
潤んだままの瞳はもう瞬いても涙を落とす様子はありません。少女はその事に安堵しながらも、沈んだ気持ちを浮かびあがらせることは出来ませんでした。
　どうしても今日、少女はお母さんとお父さんの三人でお出掛けしたかったのです。
「お父さんと、お母さんの、馬鹿……。今日は、私の誕生日、なのに」
　ずっと前からこの日は絶対一日一緒にいてね、と約束してきました。その理由は少女の誕生日だからという、可愛らしいものでした。
　二人もそれを解っていて少女の約束を守る為に仕事を徹夜してでも終わらせて、無理矢理休みをもぎ取ったのですが、どうしても二人がいないと駄目な問題が起きてしまったと、連絡があったそうなのです。
　お父さんもお母さんも最初はそれに抵抗しました。大切な娘の大切なお願を、約束を破りたくなかったのです。しかし、仕事場の人間とて必死でした。二人が来てくれなければ自分の首が飛んでしまうと大袈裟な、けれど、本当になるほどの威力を持たせた言葉を二人に何度も何度も聞かせたのです。
　流石に断る事も出来ず、結局少女との約束を破る形になってしまったのでした。
　少女は大人の事情など深く知りません。仕事で二人が約束を破る事になったという、その事実だけ知っているのです。
　また、深く知っていたとしても少女は抵抗した事でしょう。どうしたって今日は一緒にいてほしかったのですから。
　また、じわりと少女の瞳に涙が溜まります。少女は慌てて手の甲で涙を拭いますが、ぽろぽろと零れる涙は止まる事を知りません。
「うぅ〜……」

少女は鼻をぐずりながら何度も何度も涙を拭きとります。擦り過ぎた両眼は真っ赤に染まり、頬も手の甲も涙でべとべと。少女の着ているお洋服で拭いとる事もあるのか、涙の痕が散らばったお洋服に早変わり。
止まらない涙に少女の心は更に悲しくなって、苦しくなって、地面を睨むように顔を俯かせていた時、少女の頭上から一つの声が落ちてきました。
「こんな所にいたんだね」
それは少女を見つけられた事に安堵して、柔らかい優しい声でした。少女は勢いよく顔を上げて声の主を見つめます。
「お祖母ちゃん……」
「お母さんとお父さんから事情は聞いてるよ。……本当に残念だったねぇ」
「……うん、でも、でも、」
「でも？」
「私、お父さんとお母さんに、大嫌い、なんて嘘吐いちゃった。いなくなっちゃえ、って、本当に、思ってない、のに、……ふぇ……ど、どしよう、……ほ、本当に……いなく、なっちゃったら……」
沢山泣いてスッキリした少女の心は既に約束を破った二人に対する怒りより、自分が口にしてしまった言葉に対する後悔で一杯だったようです。
涙でぐしゃぐしゃな顔を見たお祖母さんはおやおや、と優しい顔で微笑み、少女の涙をそっと拭ってやりました。
「大丈夫だよ。お父さんもお母さんも仕事に出掛けただけだから。ちゃんと今日中にお前の元に帰ってくるよ」
「…ひっく……ほ、本当？」
「あぁ、本当だとも。だから、お祖母ちゃんと一緒にお家に帰ろうね。お祖父さんもお家で待っているから、三人で一緒にお父さんとお母さんの帰りを待っていよう」
「……うん……」
少女はお祖母さんの言葉に頷いて、ベンチから立ち上がります。そして恐る恐る、お祖母さんへと手を伸ばしました。
お祖母さんはそれに気付いてニッコリと微笑んだら、その手をしわしわの手で優しく包み込みます。
少女は嬉しそうに笑って、お祖母さんと二人、手を繋いでお家に帰りました。
その日は一日、お父さんとお母さんが帰ってくるのを待っていた少女でしたが、二人は少女が睡魔に負けてしまうその時まで帰ってくる事は無かったのです。
そして少女が次にお父さんとお母さんに再会した時には、二人とも静かに眠りについていました。触れれば冷たい、悲しい姿となって少女の前で永遠の別れを告げたのです。

18：いなくなった嘘吐き少女の両親は

　少女の両親の葬儀は厳かに執り行われました。誰もが早すぎる二人の死を悲しみました。そして取り残された少女の事を想い、誰もがどう声を掛けるべきなのかと口を噤んでしまいます。
　少女は泣いていませんでした。お父さんとお母さんの死を受け止めきれなかったのです。二人がどうして死んだのか、どうして目覚めないのか、どうして喋ってくれないのか。幼すぎた少女が受け止めるにはあまりにも過酷な現実でした。
「どうしてお父さんとお母さんは箱の中で眠ってるの？」
　少女は言いました。
「どうしてお父さんとお母さんを閉じ込めてしまうの？」
　少女は手を伸ばしました。
「どうしてお父さんとお母さんを土の中に埋めてしまうの？」
　少女は土を掘り返そうとして――お祖父さんの手によって止められてしまいます。
「どうして？　なんで？　いやだ、いやだよ、お父さんと、お母さん、助けて、ねぇ、助けてよ！！」
　少女は叫びました。手を動かし足を動かし、全身で抵抗して暴れてお父さんとお母さんを求めたのです。
　あまりにも痛々しい姿にお祖母さんは泣き崩れ、お祖父さんは強く、強く少女を抱きしめました。
「お父さん、お母さん！！」
　少女の叫びは空を裂き、しかし、天に届く事は無く、大地に落ちては消えていきました。
　――数週間後、少女はお祖父さんとお祖母さんの家に引き取られて生まれてからずっとそこで育った街から少し離れた街へと移動しました。
　その際に少女は抵抗しませんでした。生まれた家から離れる事に、育った街から離れる事に、少女は何も感じていなかったのです。
　お祖父さんとお祖母さんの家に引っ越してからの少女はずっと部屋の中に閉じ籠りました。
　お祖父さんが声を掛けても、お祖母さんが食事を運んできても、少女はうんともすんとも言いません。
　少女はずっと考えていました。お父さんとお母さんと喧嘩をしたあの日、別れ際に口にした言葉が本当になってしまったのだと思いました。
　怒りにまかせて放った言葉とは言え、本当にそう思っていたわけではありません。あれは「嘘」だったのです。けれど、その「嘘」は二人を傷つけました。そしてその傷の所為で二人は死んでしまいました。
　少女はお葬式が終わった後からずっと、そんな風に考えていたのです。
「もう、嘘は吐いちゃ駄目。私が嘘を吐いたらまた誰か、死んじゃう。ううん、喋る事だって駄目。きっと、また、私の言葉が誰かを殺しちゃう」
　暗い方向へと思い詰めた少女は口にした言葉通りに喋る事を止めてしまっていたのです。幾ら

お祖父さんに怒られようとも、お祖母さんに悲しまれようとも、誰かを失ってしまうような言葉しか紡げない口ならいらないと、少女は自ら言葉を封印しました。
　ですが、ずっと黙っている事は難しいのです。喋らないと決めたその決意をお祖父さんとお祖母さんは知っています。知っているからこそ、二人は少女にこう言いました。
「お前がどうして喋らなくなったのは解ってる。だがな、言葉を無くして意志が伝わると思ったら大間違いだぞ」
「そうよ。ちゃんと言葉にして伝えてもらわないと、私達にはお前の言いたい事は一つも解らないんだ」
「お前の両親が無くなったのは、決してお前の言葉が原因なんじゃない。不慮の事故で無くなった――その事故が原因なんだ」
「お願いだから自分の言葉を封じようとしないでおくれ。嘘を吐いてくれてもいい。お願いだから、そんな風に閉じこもらないでちょうだい」
　沢山の想いが込められたその言葉に、少女は口を開きます。けれど寸前で自分の誓いを思い出し、ギュッと頑なに唇を閉ざして首を横に振るのです。そしてニッコリと、大丈夫だと伝えるように笑うのですが、お祖父さんもお祖母さんも安心してはくれません。
　二人はとても悲しそうに少女を見つめます。少女はそんな二人を見ていられなくて、部屋の中へと閉じこもりました。
　一人でいるときは口を開く事が出来ます。誰も聞く人はいませんし、聞いていたとしても自分だけです。
　だから少女はいつも部屋の中で溜めこんだ言葉を少しずつ吐き出していました。
「ごめんなさい。喋られなくて、本当にごめんなさい」
　少女の為にと言葉を尽くしてくれているお祖父さんとお祖母さんに対する謝罪が幾つも零れてきます。その度に泣きたくなる少女は瞼をきつく閉じて、泣くのを我慢するのでした。
「ごめんなさい。喋られなくて、本当にごめんなさい」
　繰り返し、繰り返し、謝罪だけを紡ぎ続ける声は次第に途切れ途切れになり、気付けば寝息へと変わっていきました。
　閉じた瞼の裏側に広がる闇の中、少女は大切な人の言葉を思い出していました。

19：「死」を紡ぐ嘘吐き少女

「いいか？　嘘を吐くのは大切な人の為にだけ吐きなさい」
　遠い、とても遠い場所から少女に語りかける声がありました。
「嘘と言うのはね、どんな形であれ、誰かを必ず傷つけて悲しませるんだ。今はまだ可愛らしい嘘だと分かっていて、お前を甘やかしてくれるけど、大きくなったらそれは通用しない」
　優しく諭す様に、そして真剣なその声の主を、少女は知っていました。
「だから、お前が今後も嘘を吐くと言う場合は、大切な人の為にだけ、その嘘を使いなさい」
　いつだって少女を守ってくれていた、いつだって少女の嘘の意味に気付いて少女を構ってくれていた、大切な人の声でした。
「嘘というのは時に必要な時があるんだ。その必要な時に吐いてしまう嘘は、とても優しい嘘で、大切な人の心を守ってくれる力を持っているんだ」
　少女がこの声の主にそう教わったのは、もうずいぶんと前のお話です。最後まできちんと聞いていたわけでもなく、また、幼かったからこそ全てを理解していたわけでもありません。
「嘘を吐かれたその瞬間は、きっと傷つくだろう。悲しむだろう。大切な人に言われた嘘なら尚更。だけど――その「嘘」があったから、大切な人は幸せになれるんだ」
　それでも、少女に「嘘」の意味を教えてくれたのは、大切な人の為に紡ぐ嘘の力を諭してくれたのはその声の主なのです。
「傷つけてしまう――あり、悲しませてしまう――もあるけれど――その嘘に込めた本当の――が伝わった瞬間、大切な人は――になれるんだよ。だから、お前も――くなってからも嘘を――――ると言うのなら、大切な人――だけに――吐きなさい。そして――」
　何か喋っているような気はするのですが、途切れ途切れにしか声が聞こえません。少女は耳を澄ませますけれど、ノイズに邪魔されて言葉として伝わってこないのです。
　ふと、少女は朧げな記憶を思い出します。その先に続く言葉を聞く前に眠ってしまっていたんじゃないか、と。実際長すぎた話と難しい言葉に少女は睡魔に負けてしまったのですから、覚えていなくて当たり前なのです。
　覚えていなくて当たり前？　――それが意味する事とはなんなのか。少女が考えたその瞬間に、声はプツリと消えてしまい、少女自身も眼を覚まします。
　全ては夢だったのです。少女の中に眠る記憶が巻き戻された、あの日の夢。お父さんが少女に真面目なお話をしてくれた記憶。少女はそれを夢で見たのはきっと、今の現状を解決する方法がそこにあるのだと、お父さんが教えてくれたのだと思いました。
　必死になって少女は夢と記憶を手繰り寄せます。
「えと、大きくなっても嘘を吐くのなら、大切な人に対してだけ、嘘を吐く。その人は幸せになれる、だったよね？」
　何かが足りないような気がするけれど、少女の覚えている限りの夢と記憶の内容ははしょりはしょってその答えを導き出しました。
　少女はうんうん唸ります。大切な人に対してだけ嘘を吐く、というのなら、少女のお祖母さん

、お祖父さんに対してだけ嘘を吐くと言うことになります。
　けれど少女はそれだけでは足りません。大切な人だけでなく、もう誰も失いたくなかったし、幸せになって欲しいと願っていたのです。
「……大切な人にだけ、なら、私はこの街の人達全員を大切にすればいいんだ！！」
　極論を捻りだした少女は顔を輝かせて大切な人の問題をクリアしました。そして次に嘘の内容を考えますが、それは最初から決まっていました。
「毎日、大切な人に吐く嘘は……死んじゃうよって言えばいいんだよね」
　死んでほしくないから嘘を吐く。死んじゃうよ、と笑って告げればきっとその嘘は反転されてその人を守ってくれる筈だ。
　誰だって死んでしまうなんて言われてははいそうですかと死ぬ事などありませんから、少女はそれを嘘と言う形で大切な人へ届けようとしたのです。
　死んじゃうよ――死なないよ。少女の嘘は少女の中で願いになり、優しい嘘となりました。しかし、それが全ての人に届く事は無かったのです。
　少女は知りませんでした。少女のその嘘は誰に紡いでも傷つけてしまうと言うことを。少女は覚えていませんでした。今はまだその嘘が許されるけれど、大人になれば許されなくなるということを。少女は聞こえていませんでした。嘘を紡ぐのならば傷つける覚悟をしなければいけない事を。
　知らぬまま、覚えていないまま、聞こえていないまま、少女は己に喋る事を赦しました。
　そして「死」に関する中途半端な嘘を紡ぎ続けたのです。

　嘘吐き少女はこうして生まれ、嘘吐きの代償を、全てを失うという結末をもって支払ったのでした。

20：気分屋な魔女の本質は

　全てを語り終えた少女は、魔女に懇願しました。
「私はもう、嘘を吐きたくないの。誰かを傷つけるような言葉を喋りたくない。だから――この口を無くしたいの。お願、魔女さん、私の願いを叶えて！！」
　強く強くしがみついて、少女は必死に願いを口にします。
　少女は嘘を吐く自分が嫌になってしまっていたのです。そしてそれが引き起こした結果を恨みました。
　けれど、それ以上に傷つけてしまった事実が悲しかったのです。
　嘘に込めた想いはいつだって「死なないで」という願いだけだったのに。少女の嘘は本当に「嘘」にしかならず、決して「優しい嘘」にはなってくれなかったのです。
　魔女はそんな少女を憐れむように見つめます。魔女とて嘘は沢山吐きます。人間の愚かさをその身をもって体験してきているからこそ、嘘を吐く事に対する罪悪感は無く、寧ろそうされても文句は言えまいと自分本位な答えを出すような性格でした。
　本当に言い伝え通り気分屋で、意地悪で、最低な女（…）だったのです。
「君の願いは分かった。分かったから……私を解放してくれないかなぁ？　流石にこの状態は私も君も辛いと思うんだけど？」
「え？　……あ、す、すみません！！」
　言われて気付いた二人の体制に、少女は慌ててその手を離しました。勢いでしがみついていたとはいえ、まさか魔女の胸元を掴んでいたとは思わなかったのです。
　しかも若干引き寄せるようにしていた為、魔女も少女も互いに前のめりになって結構な至近距離を保っていたりもしました。
魔女にしがみついてた為に浮かんでいた腰を下ろしたところでその事実に気付いて赤面する少女でしたが、はた、ともう一つ気付いた事があります。
「あの、変な事を聞きますけど……」
「ん？　何？」
「貴方は魔女、なんですよね？」
「魔女なのは確かだよ。否定はしないねぇ」
「……男なのに？」
　恐る恐る、間違いかもしれない可能性を片隅に置いて少女は言いました。
　魔女は器用に片眉を吊り上げ、次いで、ニンマリと笑顔になります。悪戯っ子の様なそれは魔女の外見に似合わず子供っぽい仕草でした。
「人間って、そういう所が愚かだよねぇ。魔女だからって女ばかりとは限らないんだよ。まぁ、大抵の男は魔法使いを名乗るけれど、私は「魔女」なのさ。力を持ってこの世に生まれ、絶対に犯してはならぬ領域をあっさり犯す禁忌の存在。同族は私を型破りの魔女と呼ぶがね。――あぁ、言葉に囚われて本質を見抜けないのは愚かだと覚えておくといいよ」
　楽しげに告げる魔女の言葉に少女は呆気にとられてしまいます。願いを叶える魔女という言葉

から女だと思い込んでいた節があり、また、外見からでは魔女は女にしか見えないのです。本人もそれを自覚しているのでしょう。必要なら女と偽って人間を騙す事もありました。そして騙したつもりはなくとも勝手に騙されていく人間もいて、その滑稽さを魔女は密かに楽しんでいたりもするのです。
「――と、話がずれてるよ、お嬢さん。願い事はいいのかな？」
「……あっ！！」
「ま、最初にずらしたのは私なんだけどねぇ」
　しがみつかれていた体勢から解放されたくて口にした言葉を皮切りに横道にそれたという自覚はあった魔女は、軽く肩を竦めてそう口にした後、雰囲気を一転させました。
　少女もそれにつられるように固い雰囲気を身に纏います。そして真剣な眼差しを向ける魔女へと少女は願いを改めて口にしたのです。
「お願いします、魔女さん。私はどうしてもこの口を無くしたいんです。その為に必要な対価なら、どんなものでも支払います――だからどうか、この願いを叶えてください」
　深く深く頭を下げて少女は頼み込みました。対価として何を差し出せと言われるのかは解りません。けれど、何を差し出せと言われても少女は頷き一つで了承する覚悟を持っていました。
　傷つけることしか出来ない口が無くなるのなら、自分の何かを失ってでも叶えたいと思っていたのです。
　魔女はそんな少女の覚悟をしっかりと受け止めました。そして、制約に叶う人間なのだと理解した瞬間、重々しくその口を開きました。
「無理だね」
「！！」
　魔女の容赦ない一言に少女は頭を上げます。そこには顔を顰めた魔女がいました。
「口を無くすなんて芸当、流石の私でも無理。人間の体の構造の一部を取り外すことが出来るのは神様くらいだろうよ」
　いかに型破りな魔女とて、出来ない事はあるのです。例えば腕や足、耳や指、手首などと言ったものであれば無くそうと思えば無くせます。
　けれど口は顔に付属している一部です。それを取り除くと言うことは顔そのものを取り除く事になりますので、魔女には出来かねました。

21：嘘吐き少女は眼先の欲に囚われて

　少女は魔女の返答に絶望しきってしまい、がっくりと肩を落として落ち込みます。縋る想いで森の中を歩き続けたのに、願いは叶わぬ物となってしまったのですから、それは当然のことでしょう。
　そんな少女に対して魔女は言いました。
「口を無くす事は出来ないけど、声を奪うことなら出来るよ？」
　一瞬何を言われたのか解らず、少女は瞬きを一つ落とします。そして魔女の言葉を脳内で噛み砕き、飲み干し、解釈して――またも少女は魔女にしがみつきました。
「本当ですか！？」
「あぁ、ただし――対価が必要になる。それは分かっているだろうね？」
「はい、勿論です。どんな対価でも支払います。ですから、私から声を奪ってください！！」
　ぎゅう、と力強く魔女の服を握りしめて懇願する少女。魔女はそれを諌めるようにポンポンと少女の頭を撫でました。
　少女はその感触に覚えがありました。けれどどこで感じたものなのか解らず、内心で首を捻ります。
　遠い過去ではなく、ここ最近の出来事の筈。そこまでは思い出せるのにそこから先が出てこない歯痒さに少女は顔を顰めそうになりますが、それにストップを掛けたのは魔女の言葉でした。
「対価を支払う覚悟は分かったから……お嬢さん？　出来ればしがみつくのはご遠慮願いたいんだがね？　これ以上しがみつかれると服が伸びてしまう」
「え？　あ、ご、ごめんなさい！！」
　またも慌ててその手を離した少女は自分の行動を恥じ入る様に顔を赤く染めました。解放された魔女はそんな少女を面白そうに眺めた後、声の対価を思案します。
　声とは言葉を紡ぐもの。言葉は意志であり、霊力であると魔女は考えています。ではそれに見合う対価とは――浮かんだ答えを口にすることを魔女は戸惑いました。
　普段ならば魔女は戸惑いもせず口にした事でしょう。しかし、少女に対してだけはどうしても口に出来なかったのです。
　少女の過去を知り、願いを知り、少女のコロコロと変わる感情を知り、魔女は対価を受け取る事を惜しんだのです。
　しかしどれだけ魔女が惜しんでも、少女はあっさりとそれを手放すのでしょう。
　決意の固い瞳を持つ人間の末路を魔女は何人も見てきました。願いを叶える代わりに貰った対価がその末路です。
　命という対価を支払った人間は、叶った願いに対して魔女に感謝を告げてその幕を閉じました。あるいは命に等しい対価を支払って、生きながらにして死んでいるという末路を辿った者もいるのです。
そして今回求める対価に関して言うならば――それは後者に該当しました。
　魔女は深く息を吐きだします。己自身の覚悟を定める為に。

そんな物々しい雰囲気の魔女に対して少女は固唾を呑んで対価が告げられるのを待ちました。
　どれだけの時間が過ぎたでしょうか。魔女はようやっと、その重い口を開きました。
「君の願いを叶える為の対価だが――」
「はい」
「お嬢さん、君の心を私に差し出してもらおう」
「私の心、ですか？」
「そうだよ。君の言葉は誰かを傷つけるものなのだと君は言ったね？　そして嘘を吐きたくない、とも」
　間違いはないか、と視線で問いかけてくる魔女に対して少女は深く頷きました。魔女はそれを然りと受け止め、言葉を続けます。
「お嬢さん、言葉とは意志であり霊力なんだ。言葉に込めた想いが強ければ強いほど、それは言葉を紡いだ主の意思となり、霊力となって意味を成す。……まぁ、簡単に言えば想いを込めた分だけ刃にも盾にもなる、と言うことだねぇ。しかしお嬢さんはその言葉を紡ぐ為の声がいらないと言う。嘘を吐き出すだけの声を奪って欲しいと言う。なら言葉に込める想いを――心を対価としても問題なかろう？　声を奪われた瞬間に、想いを紡ぐ事など無くなるのだから、そんな人間に心など必要もないだろう？　なら、私が貰ってしまっても問題ないわけだねぇ。それともお嬢さんは自分の心を差し出す事に、未練がおありかな？」
　淡々と落とされる言葉に口を挿む暇は無く、少女は魔女の言葉を追いかけるのに精一杯。全てを理解できたわけではありませんが、それでも大事な部分は理解できたように思います。
　この声を失う対価として、心を渡す。感情を込める言葉を、嘘を紡がなくなる為に声を奪われるのだから、感情の源である心を魔女に渡したとしても問題はないだろう、と言われているのだと少女は解釈しました。
「――いいえ、無いわ。私、この心を失ってもいいから、声を奪って欲しい」
　少女は魔女の言葉に頷きます。心を渡す代わりにこの声を奪ってもらう。そうすればもう、誰かを傷つける事も無いし、悲しませる事も無いのだと信じていたからです。
　ですから少女は気付きませんでした。頷いた少女に魔女が傷ついていた事に。心を失うと言う意味を、ちゃんと理解していない己自身に。
　少女は愚かな王様と同じく、眼先の欲に囚われて周りが見えなくなっていたのです。

22：嘘吐き少女が告げた感謝の言葉

　魔女は自分が言いだした対価とは言え、それを少女に伝えた事を後悔しました。寧ろ声なら奪える、だなんて言った過去の自分を恨みました。
　対価を伝えても引きはしないだろう、寧ろ進んでそれを受け入れるだろうことは解りきった事でしたが、少女はきちんと理解していないのです。
　心を失うと言うことがどれだけ苦しいことなのかを。一度失ってしまえばもう二度と同じモノは手に入りません。元には戻りません。
　それを経験している筈なのに、少女は目先の欲に、願望に執着しすぎていたのです。
　魔女は思います。人間はこれだから愚かしいのだと。
　失ってようやく気付いても、もう取り返しはつかないのだというのに、どれだけの時を経て、時代が進んでも、その事だけは永遠に学ばないまま、人間は生きていくのでしょう。これから先も、ずっと。
　魔女は立ち上がり、大きな机の傍へと行きました。そして付属の引き出しから小瓶を一つ取り出し、また少女の元へと戻りました。
　少女は魔女の行動を不思議そうに見つめます。手に持っている小瓶の中身は見えないけれど、液状の薬かなにかが入っているのでしょう。小瓶の口径が小さいことからそう察しました。
　魔女はその小瓶を少女へと差し出します。
「これをお飲み」
「これを……って、あの、これは、一体？」
「君の願いを叶える薬さ。一口分しかこれには入っていないんだが、それだけ十分の効力がある」
「これが……私の声を……」
「そうだよ。声を失うと同時に私は君の心を対価に頂戴する。なに、痛みはないさ。そう感じる心など君の中にはもう亡くしているからねぇ」
　皮肉交じりの魔女の言葉をジッと聞いていた少女は、受け取った小瓶を大事そうに握りしめて――魔女に向かって微笑みました。
「ありがとう、魔女さん。貴方のお陰で、私はもう誰も傷つけずにすみます。嘘を吐かずにいられます。――本当に、ありがとう」
　心の底から嬉しそうに告げた感謝は、魔女の心に響き渡りました。暖かな気持ちは嬉しい筈なのに、どうしてか酷く寂しくて。魔女はそっと瞼を伏せました。
　少女は魔女から視線を外すと、小瓶の蓋を開けて中身を一気に口に入れ、飲みこみました。
　喉をすり抜ける液体は酷くひりひりとして痛い――筈なのですが、少女はその痛みを感じません。ひりひりという感触も解りません。
　それもそのはず。少女の心は既に魔女の掌の中。感情を生み出す心を亡くした少女は、願い通り声を奪われました。
　するり、小瓶が少女の手の中から零れ落ちます。ベットの上に落ちたそれはコロコロと転が

って、床へと叩きつけられました。
　小さな音を立てて砕け散った小瓶。その音は少女の耳にも入っているでしょうに、少女はなんの反応も示しません。
「感じる心を亡くしてしまったからねぇ。当然と言えば当然の事か」
　魔女はポツリと呟いて少女を見つめます。コロコロと変わっていた感情豊かな少女の表情は無一色に染まり、動く事はありません。
　溜息を一つ落とし、魔女は中指と親指を擦り合わせてパチン、と音をたてました。すると砕け散った筈の小瓶は元通り。中に入っていた液体も含めて新品の姿を取り戻します。
　ふよふよと小瓶は魔女の目線まで浮かびあがり、次いで、その姿は一瞬にして消え去りました。
「さて、小瓶も片付けた事だし……お嬢さんの心はどうしようかねぇ？」
　掌の中に納まっている淡い光。それこそが少女の心でした。しかしよくよく見ると少女の心は闇に呑まれるように光を失い、また光を取り戻しを繰り返しています。
　魔女はそれをそっと優しく撫でました。すると光は闇に呑まれることは無くなるものの、時間を置けばまた闇に呑まれて光を失います。
「闇はお嬢さんの傷を示すんだが、こんなにも傷つくくらいに嘘を吐き続けていたとはね。しかし、これは自業自得というものさ。中途半端な覚悟で吐く嘘は、周りだけでなく自分をも傷つける。お嬢さんは嘘を吐くのは得意でも、優しい嘘を吐く事は不器用なままだったんだねぇ」
　もう誰も失いたくないという想いから選んだ嘘は結局中途半端なまま。それと気付かぬ少女は純粋な想いだけを強くしてしまったのです。それ故に周りを大きく傷つけ、自分をも傷つけていたのでした。
　全て失う事でようやっとそれに気付けた少女は、元凶たる声を手放す事でもう誰も傷つけないようにしたかったのでしょう。そしてその通りにはなりましたが、哀しいかな、少女はもう二度と傷つける事も傷つく事も無くなった代わりに、生きると言う事も手放してしまったのです。
「心亡き人間は人間に非ず。ただのお人形になってしまうのだよ。お嬢さん」
　ベットの上で動かない少女に、魔女の声は届いているのでしょうか。語る言葉を、声を失った少女はなんの反応も示しませんでした。

23：気分屋な魔女が選んだ一つの賭け

　生きているのに生きていない。心を亡くした少女の姿を、魔女は憐れみました。声を奪う前に貰ったありがとうは今も暖かく魔女の心を満たしているのに、同じくらい心の中を寂しい気持ちで一杯にしているのです。
　魔女には解りませんでした。少女がこの道を選んだ事が本当によかったことなのか。嘘を吐く事が嫌で、それを阻止するためとはいえ心を亡くしてまで声を失うことが正しかったのか。どう考えても魔女には正しいとは思えません。
　しかし、それは魔女の考えでしかないのです。少女にとっては、これが最高の結末だったのかもしれないのですから。
　それでも、魔女は思います。
「これが幸せだとは、私には思えないよ。お嬢さん」
　ただ現実から逃げているだけじゃないのか。そう思えてならない魔女は一つの賭けに出る事にしました。
　対価として貰った心にそっと口付けてから魔法を掛けた魔女。見る見るうちに少女の心はハート形の結晶となって固まっていくではありませんか。しかしそれは少女の心の傷もしっかりと表しているのか、細かな傷が目立つ結晶でした。
　魔女はそれに魔法をもう一度掛けます。すると結晶は銀の鎖を付けたペンダントに加工されました。
　傷ついた心を結晶とし、それをペンダントへと変えたのには何か意味があるのか。まじまじとその出来を見つめる魔女は満足げに頷きを一つ落とした後、そのペンダントを少女の首へと掛けてあげました。
　細い首筋に似合う銀の鎖はキラキラと煌めいていて、結晶となった傷ついた心は少女の胸元を優しく飾ります。
　これまた満足げに頷いた魔女。次に取った行動は指をパチンと鳴らして少女の服装を元の服装へと交換する事でした。幾らなんでも自分の服を着せたままと言うのは流石に、と考えた様です。
「身の丈に合わない服じゃ、流石に可哀想だしねぇ」
　苦笑いに近い笑みを零しながらそっと指を伸ばして少女の頬に触れました。
「いいかい？　よくお聞き、お嬢さん。今から私は君に条件付きの眠りの魔法を掛ける。これを解く事が出来るのは、お嬢さんの心の結晶を溶かす事が出来る人物だけだ」
　少女は魔女の言葉を聞いています。しかし、表情は動きません。聞いている、と言う風に見えるだけかもしれません。それでも魔女は全てを承知の上で言葉を語ります。
「お嬢さんの心を溶かしてくれる人物が現れるまで、独りでずっとこの家の地下で眠り続ける事になる。それは長い長い眠りになるだろう。しかし、その眠りは贖いだと知るといい。現実に向き合わず、願いに縋る事で逃げた事に対する贖いなのだと」
　少女からすると逃げたつもりはないのかもしれません。けれど、嘘に立ち向かうのではなく願

いと言う形で声を失くした少女は逃げてしまったのです。嘘と言う大きな刃から。その刃が付けたであろう沢山の人達の傷から。
魔女は唄う様に語り続けます。
「贖いに適した時間が過ぎたなら、きっと君の前に誰かが現れる。お嬢さん、君の心を溶かしてくれる誰かが、だ。――そうだね、ただ出会って目覚めるだけでは興が無いか。うん、ここはやはり定番の定番、口付けで眼を覚ます、に切り替えておこうか」
　ふふ、と楽しげに笑いながら魔女は頬に触れていた指を額へと滑らせ、そっと小さく呪いを紡ぎます。それは少女を眠りへと誘い、ゆらりと揺れた身体はそのまま後ろへと――倒れ込むその前に、魔女の腕が抱きとめました。
「お休み、お嬢さん」
　優しい声で耳元にそう囁いたなら、魔女は少女を抱き上げて本棚へと近づきます。本棚は魔女が眼の前にやってきた事を察知すると、その身を奥へ奥へと後ずさりました。
　ズズ、ズズズッと音を立てて後ろへ後退した後、今度は右へとずれていきました。完全に音がしなくなった頃には本棚一台分の抜け穴が完成。地下へと続く階段が数段、部屋の明かりに照らし出されていました。
　魔女は迷うことなくその階段を下りていきます。後ろで本棚が元の位置へと戻る音を立てても気にせずに先を進むその姿は慣れたもので、完全に入口を塞がれてしまっても慌てず騒がず魔法で明りを灯していきました。
　どれだけの段差を歩いた事でしょう。数えるのも面倒なくらいに奥深くまで下りた所で、ようやっと広々とした地価の空間へと魔女は下り立ちました。
「さぁ、ここがお嬢さんの眠る場所だよ」
　魔女の視界の先には一面に広がる花畑。地下である筈なのに地上の様に明るく、太陽が差し込んでいるかのような暖かさが瑞々しい花々を生み出していました。
「ちょっと特殊な仕掛けを施していてね。此処は年中春の様な場所なのさ」
　自信作だと言わんばかりに魔女は嬉々とした声で少女に話しかけます。眠っている少女にその声は届いていないことなんて、眠らせた張本人である魔女には解っています。
　それでも少女に伝えたいのです。長い長い眠りの時を、独りぼっちにはしないのだと。

24：気分屋な魔女の贈り物

　魔女は花畑の中へと足を踏み入れました。花を踏みつぶさないように気を付けながら、中央付近までゆっくりと歩きます。
「この辺り、かな？」
　程良く光も当たり、風も優しい場所なら少女も眠りやすいだろうと魔女は考えました。少女自身は魔法で眠っているので眠りやすいも何もあったものではないのですが、そういったことは敢えて眼を逸らす魔女なのです。
　少女を寝かせる位置を決めた魔女はタタン、と右足を踏み鳴らしました。すると眼の前に大きな椅子が登場しました。
　魔女は抱きかかえていた少女をその椅子に座らせます。背丈の高い背もたれに少女の上半身を凭れかけ、少女の両腕は手すりの上に。足は地面をギリギリ触れるか触れないか程度の空間を残してゆらゆら揺れています。
　魔女は少女の前にしゃがみこみ、そっとその顔を覗き込みました。
「此処で長い長い眠りを迎える事になるんだが、安心おし。お嬢さんの眠りは時を止めた上での眠りとなっているからね。どれだけ長く眠ろうと、その肉体は老いることはないのさ。ただし、目覚めた瞬間からその時は動きだす。永遠の命ならぬ永遠の肉体、と言うわけではないからねぇ。」
　遠い過去に出会った愚かな王様を引き合いに、魔女は言葉を紡ぎます。
「そう言えばあの王様は一体どうなったやら。永遠の命の意味を今も謳歌中ならなによりなのだがね」
　ここに王様がいたら確実にその首を撥ねられていた事でしょう。とはいえ、魂だけとなった愚かな王様に魔女の首を撥ねるなんていう芸当無理な話なわけで。
　出来ることと言ったら呪うか付き纏うかのどちらか――なんて、どちらをやったとしても魔女には敵いっこないのでしょうけれど。
　クスクスと可笑しそうに笑った魔女は「あぁ、話がずれてしまっていたね」と軌道修正するように咳払いを一つ落とします。
「そう言うわけだから、君は何一つとして不安に思うこと無く、ゆっくりお休み。大丈夫、独りで眠るわけではないよ。君を常に見守ってくれている花々があるからね」
　魔女の言葉に答えるように花々はその身を揺らします。まるで少女を歓迎するかのように優しい揺らめきは、魔女の心をも擽っていくのです。
　ふわり、風が優しく吹きました。少女の髪と魔女の髪を撫でるように通り過ぎたそれに合わせて魔女は立ち上がります。
「さて、私もそろそろ行かなければならないね」
　身体をうんと思いきり伸ばして、少女を見下します。魔女がこの場所に現れる事は二度とないのでしょう。長い眠りを邪魔したくないという想いからではなく、魔女自身が選んだ道の為に、です。

「私はこれから旅に出る。この森で願いを乞う人間を待つのは飽きてしまったんでね。気紛れに適当な場所へと顔を出して、私の制約のままに願いを叶えていこうと思うのさ。そして、いつかこの枷が外れたら――私は私に掛けた呪いと魔法全てを取り外し、静かに眠ろうと思うよ」
　そっと、首に嵌められた黒い枷を撫でます。神様から与えられた（と言うには語弊があり過ぎますが）それを外す為に森を旅立つという魔女は、どんな想いでそれを口にしているのでしょう。
　想像するには難く、感じ取るにも難く、結局全ての想いは魔女の中にしか存在しないのです。
「そう決意した理由は聞かないでおくれよ？　もしかしたらそんな決意、これからの長い長い時の中で崩壊してしまうかもしれないんだから」
　気分屋な魔女らしい言葉で補足した後、魔女はその身をかがめて少女の額に口付けを落としました。
「さようなら、優しいお嬢さん。君がいつの日か目覚めたその先で、幸せになってくれる事を願っているよ」
　そう言い残し、魔女はその姿を一瞬にして消し去りました。残された少女は眠りの中。静かに、静かに息をしながら目覚めの時を待っています。

　その寝顔は安らかな微笑みを湛えていました。

一：或る語り部の幕閉じ

　さて、これにて嘘吐き少女の物語はお終いです。
　少女はその後どうなったのか、気になるのですか？

　――さぁ、どうなったのでしょうか。

　気分屋な魔女も旅立ってしまいましたし、愚かな王様は語る「口」など持ち合わせておりません。そして少女は未だ眠りの中。
　その胸に飾られた心の結晶を溶かす人間が現れるのか、現れないのか。
　魔女は黒い枷を外せたのか。自身に掛けた呪いや魔法を解いて、眠りについたのか否か。
　愚かな王様の永遠の命は何処へ彷徨い、何処にしがみつき、どんな生き方をしているのか。

　それは皆様の御心の中にございましょう。

　私はただ、語るだけ、騙るだけ。
　全ての結末を知らぬ者でございます。

　あぁ、そろそろお時間のご様子。私めはこれにて失礼いたします。

　最後までお付き合いくださいまして、誠にありがとうございます。
　これにて「嘘吐き寓話」の幕を閉じましょう。